〈講演〉

『学問のすすめ』『脱亜論』と荒尾精先生の思想

東光書院院長　村上　武

【司会】 皆さんこんにちは。お暑いところ、わざわざ遠方からもお越しいただき、ありがとうございます。東亜同文書院大学記念センターの進めておりますプロジェクトにより、本日は《『学問のすすめ』『脱亜論』と荒尾精先生の思想》という村上武先生の公開講演会を行ないます。講演会に先立ちまして、本センターの代表でありプロジェクトの総括責任者、藤田先生からご挨拶をいただきます。

【藤田】 皆さんこんにちは。ただ今ご紹介いただきました、センター長をやっております藤田と申します。昨年記念センターが文科省のオープンリサーチセンターのプロジェクトに選定され、これまでは展示施設が中心でしたけれども、総合的な書院研究を進めることができるようになりました。また本学もその影響を受けながら、愛知大学史の研究も同時に進めようということで今日まで来ております。皆さん方のいろいろなプランを立てては、それを処理するのに大変忙しい毎日を送っているところです。

今日はその一環で、村上武先生に《『学問のすすめ』『脱亜論』と荒尾精先生の思想》ということで同文書院関係のお話をしていただきます。村上先生についてはあとでご紹介があると思いますけれども、本学の記念センターを設立する以前から、いろいろな面でご協力をいただいています。村上先生のお父様も書院の卒業生であります。埼玉県の方で独自に、かつて書院に祀られていた靖亜神社を引き取られ、お祀りをしていただいていました。そういうベースのもとにいろいろな活動をされています。皆様方のお手元に『回光』というのをお配りしておりますが、これも毎月出されています。すごい執筆量です。毎回いただきっぱなしで恐縮しております。こういうような形でも、さまざまな啓蒙活動をされています。

荒尾精先生は東亜同文書院の歴史を語る上では欠かすことのできない、言ってみれば創始者に当たる方だと思いますが、この先生の著作に関しても復刻されており、その研究をされる方々にとって大変参考になる、そういう仕組みも作っていただきました。今日は書院の歴史の原点と言いますか、そのあたりを中心にお話を伺うことができるのではないかなと楽しみにしております。

簡単ですが私のご挨拶とさせていただきます。

【司会】 申し遅れましたが、私はこのセンターの客員研究員であります今泉と申します。よろしくお願いします。村上先生の経歴を、センターのポスト・ドクター武井研究員に紹介していただきます。

【武井】 私の方より講師のご紹介をさせていただきます。村上武氏は昭和13年東京で誕生されました。昭和35年東京都立大学法経学部をご卒業。昭和45年に、同文書院18期の卒業で元同文書院中華学生部の助教授でいらっしゃったご尊父徳太郎氏が祭祀を務められた近衛篤麿、荒尾精、根津一を祭神とする靖亜神社の祭主、並びに昭和6年

に創立された東光書院院長を受け継がれました。平成元年にはこちらにございます「東方斎荒尾精先生遺作覆刻出版」を出されました。この中には今日のお話にも出てくると思いますが、荒尾先生が書いた『対清意見』、『対清弁妄』なども含まれております。『増補巨人荒尾精』、こちらの図書は戦前に出版された『巨人荒尾精』が元になっているのですが、平成5年に増補出版されました。そして平成8年には靖亜神社の祭祀を、東亜同文書院の同窓会組織であります滬友会に返還されました。現在は東光書院院長、東光書院の月刊機関紙『回光』の編集・発行者でいらっしゃいます。昭和21年に『回光』が、戦前戦中の『大日本協会報』に引き続いて第88号が発行されて以来、父上の後を受けて、毎号警世の健筆をふるい、現在に到っております。号を重ねまして本年6月号で第809号を数えます。

なお、この愛知大学東亜同文書院大学記念センター設立の契機となりました孫文、そして孫文の協力者であった山田兄弟に関する非常に貴重な歴史資料コレクションの愛知大学への寄贈は、村上武先生の多大なご尽力のお陰でございます。同時に大学記念館の展示室に展示しております根津一院長像を始めとする、東亜同文書院に関する歴史資料コレクションは、村上武氏が預かっておられたものの寄託によるものも多数ございます。

【司会】 それでは今から講演会を行ないます。予定時間は2時間となっております。よろしくご清聴願います。

【村上】 皆さんこんにちは、村上でございます。今日こうやってお集まりいただき、私が話をさせていただくようになりましたのは、うちの父親が、愛知大学の前身である東亜同文書院の中に昭和10年創設された靖亜神社の祭祀を、滬友会の委嘱を受けて昭和30年から務めており、引き続き私が父の後を継いで、合計40年になんなんとする歳月を二代にわたって務めてきたことからでございます。40年と言いますと、私自身振り返ってみまして非常に短い期間であったようにも思うのですけれども、東亜同文書院は1901年に始まって、終戦の1945年にはなくなっております。愛知大学は昭和21年から60数年になっているわけですが、それと比べましても村上徳太郎と村上武の二人が靖亜神社の祭祀を維持してきたのは、決して短い時間ではなかったと思うわけです。

その間にいろんなことがございました。私自身、靖亜神社に祀られている近衛、荒尾、根津という三先覚の中で特に荒尾先生に関心を持ち、研究という程のものではありませんが、先ほどご紹介いただいたように復刻出版などをいたしました。荒尾先生の思想がこの日本に定着していたならば、日本の歴史はもっとずっと大きく変わっていたのではないかとも思います。

荒尾先生はこの尾張のご出身でございますので、ぜひともここで認識を新たにしていただき、愛知大学を中心に荒尾先生の思想というものを深く研究していただいて、それを日本の政治思想の主流になるような形に持って行っていただければと思っております。

村上徳太郎（同文書院18期生）について

私の父親の村上徳太郎について、皆さんご存じないと思いますので、ちょっと概略だけ話をさせていただきますと、村上徳太郎は明治33年、1900年の生まれでございます。1901年というのは東亜同文書院ができた年ですが、九州の佐賀市内の刻み煙草屋、要するに煙草の葉を仕入れてきて、それを自分のうちで刻んで袋に詰めて、うちの父の兄さんなどが大八車を引いて各煙草屋さんへ卸して歩くというような商売をしていたようでございます。大した商売ではなかったと思うんですけれども、これも煙草が専売になってからは商売が立ち行かなくなりまして、大変苦労したということです。うちの父は村上という姓を継がされておりましたが、元々は田中という名字のうちに

生まれております。気が付いたら村上姓になっていた、小学校に上がってそういうことに気が付いたということで、内心は非常にひねくれたと言うとおかしいですが、何か感じるところがあったらしいんです。皆さんご存じだと思いますけれども『次郎物語』という児童小説がございます。これは佐賀中学の先生をやっておられた下村湖人先生がお書きになったものですが、うちの父は下村先生に英語を習ったということもありまして、父に言わせれば「あの次郎のモデルは俺なんだ」ということを言っておりました。これは本人が言うことであまり当てにならないんですけれども。

いずれにしてもうちの父は同文書院に入る前に東京高商（今の一橋大学）の試験を受けまして、見事に落っこちております。父が我々子供に話す言い訳めいた話では、下村先生だけではないんでしょうけれども、要するに佐賀の田舎中学で習った英語は全然役に立たなかった、ディクテーションで失敗したんだというようなことを言っておりました。確かディクテーションをやったのが神田乃武（明治・大正期の英学者、辞書や教科書を著す）と言いましたか英文学の大家で、辞書などを作っておられた方です。その方が出てきて、読み上げたディクテーションの問題というのは全く理解できなかった、それで自分は落っこちたんだというようなことを言っておりました。

そんなことがあって、同文書院の試験を受けて佐賀県から1名か2名採ったんだと思いますけれども、県費生ということで同文書院に入っております。1901年に同文書院ができる前年に生まれたうちの父が18期生でございます。18期生で今も生きておられる方というのはほとんどおりません。岩田冷鐵先生が何年か前にお亡くなりになりましたが、あの方が19期だったと思います。それから先だってここでお話をしてくださった100歳になられる安澤さんが23期か24期ぐらいだったでしょうか。うちの父からするとだいぶ年が下になります。父は同文書院を卒業してすぐに、東京の新聞社に一応就職はしたんですが、自分は新聞社などというところで仕事ができる男ではないと悟り、3日目にもう辞表を出して、さっさと九州の佐賀へ帰ってしまったんです。帰ってからどうするかということをいろいろ考えた末に、自分は母校の同文書院に戻る以外にないということで、ぜひ母校の先生として採用してもらいたいという依頼の手紙を書いたそうです。

ところが待てど暮らせど返事が来ない。父はしびれを切らして「明日赴任す」という電報を打った。そうしましたらそれに対して赴任旅費を送って来たと言うんです。同文書院という学校はそういう意味では非常に人情味豊かと言いますか、うちの父が根津先生とのご縁も深かったので特に甘えさせていただいたということもあったのだろうと思いますけれども、生徒一人一人を大切にしてくださった。先輩・後輩の関係も非常に大事にする学校であった。同文書院の記念センターに、確か2期生の方の成績表が展示してあります。そのトップにあるのが真島次郎さんという、同文書院の先生をしておられた方なんですが、この方はやはり佐賀県・佐賀市の出身の方で、私はうちの父からもよく聞いておりましたし、真島先生の息子さんやお嬢さんも父のやっておりました東光書院にしばらくおられたこともあり、私も佐賀へ行った折に真島先生の未亡人の真島いまさんともお会いしたことがございました。

そんなことでうちの父は甘えさせていただいて、恵まれた環境で同文書院の中華学生部の助教授になり、中国人の学生に日本語や、日本のいろんな社会情勢その他を教えることになる。まあ22～23歳ぐらいの若い時だったんですが、張り切って教えたと。ところが4年目ぐらいになって自分はもっと勉強したい、京都大学へ行って哲学を勉強したいと考え、その当時根津山洲先生がもう京都に引退しておられたので、そこへまた手紙を出して、京都へ行って勉強したいと頼みました。ところが、かれこれしている時にちょうど上海

に大川周明さんが来られた。確かこの時に同文書院でも講演をしておられるんじゃないかと思います。父は上海の鐘紡の支店長をやっていた伊藤さんという方（カネボウ社長の伊藤淳二さんのお父さん、佐賀県人）の紹介で大川さんに会った。その時大川周明さんは父に、「上海くんだりでゴソゴソやってる時じゃない。東京は今や革命寸前だ」というような話をされた。父はそんな大川さんの言うことを信じたわけではないけれども、京都へ行こうと思っていたのをやめて、1年間の休暇届を出して東京へ向かった、と云います。

東京へ来てから、大川さん、満川亀太郎さん、安岡正篤さんといった有名な方々が社会教育研究所（猶存社とも言った）をやっていた、その大学寮というところに、助教授兼寮監という形で入った。満川さんの書いている『三国干渉以後』という本は、その当時の人達がどんなふうな文章を書いたかということの参考にもなるかと思いますのでちょっと読んでみますと、

「旧猶存社の同人が麹町区代官町なる大学寮に立て篭もったのは大正14年4月からであった。（中略）社会教育研究所は明徳親民の国士養成機関として、新たに我々同志の手に委せられた。八代海軍大将を顧問とし、大川周明君は研究部長に、安岡正篤君は教育部長になった。上海からは村上徳太郎君、朝鮮からは中谷武世、西田税両君が迎えられた」。

このようなことが書いてあります。続いて

「我々同人は、また一方において行地社を興し機関雑誌『日本』を発刊した。行地社とは則天行地の意であり、大川君の命名に由るところであった。大学寮は魂の道場、行地社は実践の芳盟、両々相俟ちて維新日本を建設せんとするにある。『日本』の発行所は最初私の自宅に置き、編輯事務は村上徳太郎君、後に西田税君がこれに当った。この行地社は後日神武会を生み出す母体となり、『日本』は同会の機関誌となったものである」。

ただ、うちの父はこの『日本』の編集兼発行人も3か月でやめており、4か月目からは西田税さんの発行人になっております。何で3か月間だけでやめたかというのは、確かこれは安田財閥のゴタゴタに大川さんとか満川さんとかが関係して、そんなことで内情がうまくいかなくなったというようなこともあったと聞いております。父は「自分は大川周明の徒ではなく根津山洲の弟子であった。それを自覚したからやめたんだ」と云っておりました。

そのようなことで大学寮をやめて労資協調会に勤めたりもしたのですが、根津先生のお招きもあって京都大学に入り、1期生水野梅暁さんと共に根津先生のご臨終の枕頭に侍したり致しまして、結局昭和5年、東光書院という私塾を興しまして、それ以降ずっと続けて今日に到っているわけです。

先ほどご紹介いただいた『回光』ですが、これは戦前・戦中は『大日本協会報』という名前で発行しておりました。終戦と同時に『回光』（「回光返照の退歩を学すべし」から）と改題しました。809号になっておりますのは、『大日本協会報』の時からの計算で、計算していただけば分かりますが、もう何十年も、私が生まれる前からの引き続きでやっているものでございます。

靖亜神社祭祀をお引き受けすることになった経緯

敗戦の年の5月に東京にあった東光書院の道場が焼かれてしまい、昭和29年にようやく埼玉県の、現在いる東松山市に東光書院の同志の方々が金を集めてくださって、土地を買ってそこに道場を再建しようということになりました。その話が出た時に滬友会の宇治田直義（13期）さんから、靖亜神社があるのでそこで祀ってもらえないかという話があり、うちの父がそれをお引き受けしたわけです。そんなことでできたのが戦後復活した

靖亜神社でございます。お配りした資料の中に写真がございますが、1935年（昭和10年）、最初に虹橋路の東亜同文書院に造営されたこの神社は大変立派な神社でございました。真中の写真が昭和30年、滬友会の依頼で東松山市に再建された靖亜神社でございます。写真で比べるとそんなに大きさが違わないように思いますけれども、真中のこれは非常に小さなものです。これは滬友会から依頼されまして、確か有価証券証書と言いましたか、5万円のお金がご神体に付いてきたという話を聞いております。それで本当に内内の、田舎の家の庭の片隅に置かれてあるような神社をここに作りまして、そこで祭典を毎年続けてきたわけです。

靖亜神社が東光書院で祀られるという話になったちょうどその時、京都にあった根津山洲先生の旧宅、山洲庵を、根津先生の奥さんのご親戚である藤居末乃さんという方が管理して守っておられたのですが、これが人手に渡ることになったので、藤居さんの方から、山洲庵にあった根津山洲先生関係のいろんな遺品・資料を是非、私共の東光書院で預かってくれないかという話がございました。父は根津先生の養子に入られた根津義直さん（仙台の方におられた筈です）を尋ねて了解を得たりしまして、手順を踏んだ上でお預かりすることにいたしました。それが現在この愛知大学へお願いして管理していただいている、私の方から行った資料ということになるわけです。根津山洲先生と奥様真さんのお位牌や荒尾先生と十烈士のお位牌も山洲庵にあったわけですが、そういったものを東光書院で預かることになったことを聞いた隣村（当時は菅谷村）の千住院の住職浅見覺堂さんという方が、『巨人荒尾精』を1冊持っておられまして、自分は荒尾先生の事績に非常に感動し、尊敬しているんだ、その方のお位牌が来るということであれば自分が勧進元になって、材木を集めて位牌堂を作ろうと発願して、大覚堂を作ってくださいました。浅見覺堂さんが材木を集めてくださって、金の方はうちの父が東光書院の関係者その他から集めて作ったわけです。

それができましたのが昭和30年ですが、落成式には緒方竹虎先生、中曽根康弘先生他、地元の材木の寄進者など大勢の方々に来ていただきました。この写真で山洲先生の銅像の前に立っている、左側は私の父の村上徳太郎ですが、右側が緒方先生です。自由党の吉田さんのあとは緒方さんになるんじゃないかと言われていましたが、12月にうちへお出でくださって、翌年の1月でしたか2月早々でしたか急逝されてしまいました。それから鳩山内閣になったという政治の動きがありました。

隣の写真は翌31年でした、4月に明徳祭と名づけた靖亜神社の祭典をやりました時に、吉田茂元総理がわざわざ大磯から3時間かけて東松山までお出でくださって、玉串を捧げていただいている写真です。これを見ていただいても分かるように、神社の社殿の軒先と言いますか階（きざはし）と言いますか、これが吉田さんの頭の高さと比べて祠堂が非常に小さなものだということがご理解いただけると思います。その隣の写真は三木さんがまだ総理大臣になる前、靖亜神社に参拝してから中国へ行きたいということで、参拝くださった時の写真でございます。

こうして祭典を重ねている間に、神社もずいぶん古くなり、檜の皮で葺いた屋根がボロボロになってしまったので、日本航空の松尾静磨さんが「自分が寄進するから建て直そう」と云う事になりました。これにはちょっとした話がありまして、ちょうどその頃、全日空の飛行機が立て続けに事故を起こしたんです。全日空の社長岡崎嘉平太先生は日中経済協会の代表をされたりして日中問題を非常に一生懸命やっておられ、靖亜神社にもたびたび参列くださっていたわけですが、「そんなに中国問題ばかりやっているから、本業の自分の会社の飛行機が落ちるんじゃないか」と岡崎先生が非難を受けるような空気が出てきまして、父は

心配していました。父は「飛行機が落ちるのは日本の航空業界全体の問題であって、一人全日空だけの問題ではない。これについては航空業界全体が、本当に褌を締めて対策を考えなければいけない時じゃないか。日中問題は日本の航空行政とはまた別に、どうしても真剣に取り組まなければいけない時なんだ。だから岡崎のやっていることも大いに応援するという意味で、松尾さんに靖亜神社の社殿（と言うほどのものではありませんけれども）の祠堂を寄進してくれないか」と云うことで、寄進していただいたのがこの右側にあるお社です。三木さんの写真の隣は、岡崎先生と松尾静磨先生のお二人です。その隣が社殿の奉献の辞と言いますか、「お納めします」と松尾さんが神前で挨拶をしておられる写真です。

そんなことで新しく社殿ができました。ただこの社殿は松尾さんに最初に作っていただいた時には、前にあった小さな社殿と同じ場所に作ったんですが、昭和60年に、私の代になってから位置を移しました。今までの神社は東の林のほうを向いていて、道路から入って来るとグルッと回り込まなきゃいけなかったんですが、方角を変えて道からまっすぐに神社に入れるようにしたい。私もいろいろ考えまして、埼玉県の東松山市から真西を向けるとちょうどその延長線上に上海がある。上海からその先へ行けば中東からパレスチナの地まで一直線で結べるのじゃないかと。靖亜神社の三先覚には中国から中東まで見据えていていただきたいんだと云う意味合いを込めて、位置を移して社殿を作りました。それがこの写真です。その時には下の土台の石なども新たに積んだり致しました。そんなふうに神社の形も3回ほど変わってきているわけです。

多くの方々にご支援いただき松尾さんに社殿を寄進して頂いたりしてやって来たわけですが、そのあといろいろ並べてありますのは、外務大臣の藤山さんと、左におられるのは宇都宮徳馬先生です。宇都宮先生も政治家として日中問題に真剣に取り組んでおられた方で、靖亜神社には毎年ほぼ欠かさず参列いただきました。そして、毎年心からのご支援を続けてくださいました。その隣の写真は、左側が園田外務大臣です。うちの父親が真中にいて、右側は確か高田浩運さんという国会議員の方です。その次はずいぶん昔の写真ですが、宇都宮先生が歩いておられて、その後ろの若い方は近衛通隆氏、霞山会の会長です。今は近衛会長もずいぶん年をとられて腰が曲がったりしておられますけれども、この当時はまだ颯爽と歩いておられました。その次の写真で宇都宮先生と話をしておられるのは根津菊恵さんと言いまして、根津芳造（根津一先生の甥にあたる）さんの連れ合いの方です。根津芳造さんは外交官をやっておられた方で、この方も同文書院3期の卒業生です。菊恵さんは根津先生の身内の方で、靖亜神社にも、あるいは毎年滬友会でやっていた根津先生の墓参にも、お元気な間はずっと来てくださっていました。

そんなことで靖亜神社の祭典は続けられて来ました。時代が下って、下の段の一番左の写真、これには滬友会と愛大の関係の方々もおられます。テントの端のすぐ脇で傘を持っている方は井柳学さんと言いまして、確か愛大同窓会の副会長をやっておられたと思います。この当時は関東の同窓会の役員を非常に熱心にされて、靖亜神社の祭典に熱心に力を貸してくださいました。その隣、頭のはげておられる方が岩田冷鐵さんという19期の方で、その隣が大石明信滬友会会長、その隣が井出一太郎先生と井出一太郎先生の奥さん、それから話をしているのが私です。このような方々がお見えになった。靖亜神社と云う門柱を立ててございますが、これは靖亜神社の位置を私の代になって変えた時、山水楼の宮田武義さん（同文書院の12期、100歳を超えて亡くなられた方）に、靖亜神社という字を書いていただき、それを彫った柱を作りました。その次の写真は靖亜神社の縁起で、その下の囲みの中に書いてある文章を書い

て神社の前に立てました。一番右下の写真は中曽根さんです。中曽根さんも一番最初からずっと東光書院あるいは靖亜神社にしょっちゅうおいでくださった。中曽根さんが東光書院の父のもとで坐禅をしたり修行をしたりというような縁もございまして、非常にお世話になっているんです。中曽根さんに過去の靖亜神社との関わりとか東光書院との関わりなどについて、私が『回光』の600号記念の特集号を出した時にいろいろ話をしていただいた時の写真です。

このように靖亜神社には40年の間に非常に多くの方々が、一つの目的意識と言いますか、日中の友好であるとか、アジアに平和をもたらさなきゃいけないんだということを真剣に考え、私共、あるいは先輩達の呼びかけに応えて参列してくださったんです。もちろん滬友会の同窓の方々も大勢参列してくださっていました。この社殿は松尾さんにご寄進いただいたと申し上げましたが、その他に鳥居や鳥居に掲げた扁額などは、滬友会の同窓の有志の方々が寄付してくださったものでありました。

神社は生きて働いている

いろいろな見方があるかも知れませんが、私は神社というのは生きて働いているものだと思います。ですから今、「靖国神社」の問題も云われていますが、小泉さんは「慰霊のために自分で参拝するんだから、首相が靖国神社に参拝しても関係ない」と云うことを言っておられるけれども、私の見方はちょっと違って、神社というもの単なる慰霊の対象ではない、神社は必ずそこに祀られている人達の思いと、その神社が創建された時の思い、それを祀り続けて来た人達の思いが全部生きて現在に働き続ける。日本の神社とはそういうものじゃないかと考えます。ですから靖亜神社も、私はずっと40年間やってきて、その間に先ほどご紹介いただいたような荒尾先生の本の復刻もさせていただきましたし、いろいろな事があって、本当に神社というのは生きて働いているんだと実感しました。滬友会の方々が靖亜神社に参拝してくださったと云うのはこれは当然のことと言えばそうなんですが、昭和60年ぐらいから愛知大学の同窓会、特に関東支部の方々が非常に熱心に参拝くださいまして、続いて大学関係の、今日もおみえになっています学長さんとか、その他いろんな方々が参拝くださるようになりました。滬友会と愛知大学の気持ちが一体化して来た。それまでは愛知大学と滬友会はそれほどスムーズに関係が維持されていると私は感じていなかったんですが、靖亜神社に愛知大学の同窓会の方々が参拝されるようになってきたら、非常にそれがスムーズに感じられるようになったのです。

東亜同文書院大学記念センターが生まれるきっかけ

先ほど神社というのは生きて働いているものだということを申し上げました。1990年(平成2年)にたまたま愛知大学から、その時、短期大学部の事務長をやっておられた大野一石先生が参列してくださいました。

山田純三郎さんは孫文の秘書役として大いに活躍された方ですが、陳其美が山田さんのお宅でテロリストに襲われて殺され、その時の流れ弾にびっくりして阿媽（女中）が抱いていた山田さんの娘さん、小さな赤ん坊を三和土に落としてしまい、その子は頭を打って知能の発達がストップしてしまった。そのお嬢さんも革命の犠牲者であると云うことで、中国の国民党の方は、このお嬢さんの世話をしている山田順造さんを非常に大切にしておられたと聞いております。今も今泉先生や藤田先生からお話がありましたが、山田順造さんが集めたいろいろな資料がこの愛知大学に移って来るについてのきっかけは、1990年の靖亜神社の春の祭典の時に、祭典の後、大野先生と山田順

造さんも加わって、根津山洲先生や荒尾先生のご位牌の前で直会をして一杯飲んだわけですが、その時に大野先生が、

「自分は何で本間先生から頼まれて、わざわざ東京の山田純三郎先生のところへ酒を届けに行ったのか、よく分からない」

という話をされた。そうしましたら山田順造さんが「それはこの靖亜神社を本間先生から頼まれたと云うことだったのか、日本へ持ち帰ったのは山田純三郎だから、本間先生はその感謝の意味で酒を届けさせたのではないか。」と説明しました。その日は、大野先生は川越に宿をとって泊まられましたが、その大野先生を私と小高圭治（東松山市に住んでいて、愛知大学同窓会の埼玉ブロック長をやっておられた）さんと二人で、翌日山田さんの家まで車で送った。山田さんの家は資料で溢れており、足の踏み場もない。2階は2階で、不具になられて頭の発育が止まってしまったと云う先述の姉さん（民子さん）の病室みたいになっている。その足の踏み場も無いような所で二人がいろいろ話をされた。山田さんが「資料を寄託するには、愛知大学もいいな」と云うことを考え始められたのは、その時がきっかけだったわけです。

と言うのは、その前に山田さんは自分が死んだらどうするかということを考えていて、孫文の資料、それから中国革命に関する山のような資料を全部展示して、そこへ中国人と日本人の学生を一緒に入れ、自分は寮監のような形でそこへ住み込める大きな建物を作りたいんだというようなことを言っておられた。私のところへもいろいろ相談に来られて、神戸の孫文記念館だとか、あるいは青森（山田さんの出身地）の方へ持っていったらどうだろうかとか。それから私共の東光書院の土地（靖亜神社のあった2000坪ぐらいの土地）へ建てさせてもらえないかという話をうちへも持ってこられた。小さなものであれば私の所でも、何とか援助ぐらいできたんでしょうが、あの方の考えておられるのは膨大な計画で、そんな事をやったら我々はいったいどこへ行ったらいいんだと云うことになってしまう。うちにもその頃病気の母がいましたし、兄弟もいる。東光書院がなくなってしまうし、自分達の行き場所がなくなってしまうじゃないかと。それに土台その資金は山田さんあるんですか、と聞きましたら、山田さんは「いや、自分の持ってる練馬の土地を売ればいいんだ」と云われました。土地を売ると言っても病気の方がいるし、体の調子があまりよくないという奥さんもおられる。「人が住んでいるんでしょう」と言ったら、「いや、そのうちに死ぬさ」みたいなことを言ってるわけです。自分だけは生き残る心算だったんでしょう。

埼玉県で何とかしてくれないかというので、嵐山町の関根茂章さんという、嵐山町町長をやって、その時は埼玉県の教育委員長をやって居られた方のところへも二人で相談に行ってみたりしたんですが、最終的にどこへも持っていく場所がない。資料だけはたくさんあって、どうしたらいいのか。ところが1990年（平成2年）に山田さんは「愛知大学でもいいんじゃないか」ということを言い出したわけです。と言うのは、山田さんは三菱商事に勤めておられて蔣介石と非常に縁が深かったものですから、大陸の方を毛嫌いしていたんです。「愛知大学は赤だ」と最初から言っていたんですから。ところがそれが大野先生との話し合いでコロッと変わった。それで山田さんが急逝された時、阿部弘さん（39期）が山田さんのいろんな資料を整理されていて、「何とかしたい、寄託先はどこがいいだろう」と相談があったので、私は

「それはもう愛知大学以外にはないだろう。他のどこにそんな資料を、莫大な金をかけて預かり、管理してくれるところがあるだろうか。ただ貰うだけだったらいいけれども、それを整理して研究してやっていくには膨大な金が年々かかるわけですから、そんな事をやってくれるところは他にありはしない。だから愛知大学で、もし引き受けて下さるんだったらそれが一番い

いんじゃないか。」

という話をしました。阿部さんが大野先生に相談しましたら、大野先生その他愛知大学の方々から非常に有り難いご理解をいただいて、話がスムーズに進んだわけです。

そんなことを考えますと、私はこれもやはり神様の導きと言いますか、要するに神社というのは生きて働いているので、一番いいところ、落ち着くべきところに落ち着くんじゃないかと感じたわけです。資料の2枚目に靖亜神社の合祀者芳名というコピーを挟んでおきました。昭和10年靖亜神社が創建された時のご祭神としては近衛霞山公、荒尾東方斎先生、根津山洲先生のお三方であるわけですが、646名の方々が一緒に従祀されています。このような方々を祀った神社を同文書院の中に作って、学生が日々その神社に参拝すれば、神様の意向を受けて間違いはないだろう、同文書院の建学の精神から外れることはないんじゃないかということで、大内先生が靖亜神社を創建されたわけです。ですからこの646名の方々、あるいは三先覚、それから私のところでお預かりするようになった靖亜神社をこうやって熱心に参拝されたり、いろんな寄進をしてくださったりして維持してくださった方々、岡崎嘉平太先生にしろ、松尾静磨さんにしろ、宇都宮徳馬先生にしろ、いろんな方々の思いが、今度孫文と山田純三郎関係の資料が愛知大学に来て、このような立派な記念館ができたということの根本の力になっているのではないかと思うんです。そう云うきっかけを作るためには、たゆまぬ努力を続けている人がいなければならない。我々自分達のことを言うだけではなく、それ以前に同文書院の中にあった神社をきちっとお祀りし、自分達の財産を置いて来てでも、ご神体を懐に入れて苦労して日本へ持ち帰って来たと云うような方々のご努力が実っているんだ、と私は思います。

結論を申し上げておきます

そんなことで靖亜神社というのは非常に意味の深いものでありますけれども、今日の話の本題に入る前にちょっと私、話がうまく時間通りに行くかどうか分かりません。あとの話が尻切れトンボになるかも分かりませんので、まず結論だけを最初にお話ししておきたいと思います。

資料の最後のところに「結語」として書きましたが、福沢諭吉の『学問のすすめ』あるいは『脱亜論』と、荒尾先生の思想との対比で考えてみた時、まず日本は西南戦争以降遣欧使節たちによって、藩閥間の勢力争いによって、当初の維新の精神を失ったんじゃないか。当初の維新の精神というのは、日本が明治維新をなしとげた前段階では、イギリスやその他の国が清朝に対して阿片戦争をしかけたり、非常に残酷な仕打ちをするのを日本は見せつけられたわけです。それでこれは大変だ、日本もこうなってしまう。日本がこうなるだけじゃなく、今の中国の状況をそのまま見過ごしてはいけないんじゃないか、早く維新を成し遂げなければいけない、というような思いが維新の志士達にあった。惻隠の情と云うことだと思いますが、支那の様子は可哀相で見ていられない。日本がしっかりして支那を救いたいという気持ちが、当然維新の志士達の間にはあった筈なんです。これがどうも遣欧使節達の帰国で、西南戦争が争われたり、明治維新の様相がずいぶん変わって来たんじゃないかと私は思うわけです。

特にそれに付け加えてご記憶いただきたいと思うのは、当時の長州の藩閥政治に腐敗があった。腐敗と抗争が非常に激しかったものですから、それこそ、この間の松岡農水大臣の首吊り自殺ではないですけれども、生きるか死ぬかというところまで追い込まれて、明治の時代ですからそれがまかり間違うと江藤新平法務卿のように、自分が佐賀の乱を治めるつもりで出ていったら、いつの間にやら首魁だ、首謀者じゃないかと言われて、取っ

捕まって首を切られて、然も、さらし首にまでされてしまった。参議であり法務卿であり、今で言う大臣まで務めているような人の首をさらしものにするというのは、如何に明治の長州人なんかの藩閥政治が殺伐とした、追い詰められてどうにもならないような所があったかと云うことです。西南戦争で言えば西郷を征韓論者だというようなことで追い込んでしまう。自分達は何をやったかと言うと、朝鮮に対しては砲艦外交（江華島事件）、大砲を持っていって侵略しようとしてみたり、まあ侵略と言っていいかどうか、攻撃しかけてみたり、というようなことをやりながら、「西郷は征韓論だ、征韓論だ」というようなことを盛んに言った。

二番目に書いたのは、福沢諭吉が『学問のすすめ』の中で一番最初に言っている「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という非常に有名な言葉です。ところがこれは福沢諭吉が、だから人間はみんな平等に、まっとうに平等の社会でなければいけないんだというふうには言ってはいないんですね。本来そういうものであるから、誰だって努力して一生懸命やればそう云う風になれるんですよ、なれないのは努力が足りないんだ、勉強が足りないんだ、だから学問をすすめるんだと云うことです。

言ってみれば大久保だとか木戸だとか長州の人達がビスマルクの話を聞いてきて、ヨーロッパの列強の中で小さな国がどういうふうに権謀術数を使って生き残るかというようなことをビスマルクが、一生懸命日本の遣欧使節に説いたのに、彼等は非常に感動して帰って来たわけです。福沢諭吉は遣欧使節団がビスマルクに云われて感動したことと同じ結論になることを述べていたんです。感動して帰って来たら日本の国内は西郷さんとか江藤新平とか、留守の連中が、まあ私にいわせれば西郷さんの道義外交だと思いますが、朝鮮に対しても支那に対しても誠意を尽くして当たらなければいけないんだというようなことを一生懸命言っている。そんなことじゃだめだ、ヨーロッパはそんなことじゃ通用しないということで仕掛けたのが、江藤新平や西郷さんなんかに対して、要するに政界から葬り去ろう、失脚させ追っ払っておいて、更に征韓論に敗れた西郷さん達が鹿児島で西南戦争を旗揚げしなきゃならないようなところまで追い込んだ。それ以降の日本の政治は内政と外政両面で、結局ビスマルク流の、いわゆる西欧列強の覇道の政治に走ってしまったんじゃないかと私は思います。福沢の論理は遣欧使節団と同じ「弱肉強食のすゝめ」であると思います。

三番目に、東方斎荒尾精先生は西郷隆盛と心を同じくして、道義外交あるいは礼譲外交で自分の誠意を尽くす、これをまず第一に置かなければいけないと考えておられた。日本人に対してだけ誠意を尽くすわけではない。中国人に対しても朝鮮人に対しても、あるいはヨーロッパの人達に対しても誠意を尽くして、その上で筋の通った外交交渉をやらなければいけない。言ってみれば日本の本然の維新の精神と言いますか、ねじ曲げられる前の維新の精神に帰ろうということを、荒尾先生は考えておられたんじゃないかと思います。

四番目に、孫文が神戸で講演（「大アジア主義」）を行なった時、「日本は世界文化に対して西方覇道の番犬となるか、東方王道の干城となるを欲するか？」という、非常に厳しい問いかけを日本人に対して行なったわけです。日本人は明治維新の本当の出発点の精神を忘れているのか。今の日本はヨーロッパ（ビスマルク流の、と言っていいのかも知れませんが）の覇道の精神にそのまま流れてしまっているじゃないか。これを元に戻す気があるのかないのかということを問いかけたんだと思うんです。この孫文の問いかけに我々は答えなければいけませんし、それは荒尾先生の思想に帰ることでもある。今の日本の現状を見て、日本人は反省し直さなければいけないんじゃないかと思うわけです。こんなことを一応結論として皆さんにお話ししたいんですが、それに到るまでの過程

として、逐次話を進めたいと思います。

靖亜神社の滬友会への返還

靖亜神社の祭祀を40年間ずっと続けてまいりましたが、その間日中国交の回復というのが最初のスタートでした。日中の国交が回復してからは朝鮮半島のいろいろな出来事がありましたし、金大中事件などもありました。金大中さんは宇都宮徳馬先生のところへ来ておられて、私のすぐ下の弟が宇都宮先生の秘書をやっていたものですから、金大中さんがパレスホテルからどこかへ連れ去られて行方不明になった時、現場へ一番最初に飛び込んで行ったのはうちの弟だったわけです。その後捜査を要請しても日本の警察はあの時動かなかった。なぜ動かなかったかと言うと、結局韓国政府との間で何らかの連絡があったんだろうと思うんですが、本気になって金大中を探そうとしなかった。それでいつの間にやらそのまま船に乗せられて韓国へ連れ去られてしまったと云うことがあったわけです。ですからその後の靖亜神社の祭典では、金大中さんが殺されるというようなことは決してあってはならないし、韓国あるいは朝鮮半島に平和をもたらすためにはどうしたらいいかということを、もっと真剣に考えるような雰囲気にしなければいけないということで、それを祈願する祭典もやりました。あるいはまた中東パレスチナのPLO東京事務所の初代代表にアブデル・ハミードさんという方がなって初めて日本へ来た時に、ハミードさんも靖亜神社に参拝しておられます。と言うのはアラブの中東の出来事も、筋道の通った平和をもたらすためには、どうしても靖亜神社に参拝して先覚の精神からスタートしなければ、と云うことで、来ていただいたわけです。

いろいろその年、その年の願いをもって靖亜神社の祭典を続けて来て、そのような願いは段々と結実して来たわけですが、平成8年に私は靖亜神社を滬友会の方にお返ししました。なぜお返ししたかと言うと、私自身がうちの父親の死んだ年に近くなってきましたし、私の息子などに靖亜神社の祭祀を引き継いでやれと言ってもちょっとこれは無理だろうと。もう一つには私共が委託された本家本元の滬友会という東亜同文書院の同窓会がもう解散してしまう、来年か場合によっては今年なくなるかも知れませんよ、という話がありました。愛知大学でお祀り願えないかという話もその当時から出てはいたんですけれども、愛知大学で靖亜神社をお祀りするというようなことは、今日の大学と云う姿では、宗教的なものは無理ではないかと思われましたし、神社がそのままいつの間にやら風化したようになってどこへ行ったか分からないようなことでは困りますから、きちっとけじめだけは付けておこうと云うことで、平成8年祭典を催した時、滬友会（会長は春名和雄さん）の事務局長賀来揚子郎さんにお話ししましたら、私共の気持ちと実情を非常によく理解していただき、「では神社を返してもらいましょう」と云うことになりました。わざわざ滬友会の方から私の父と私と兄（兄は父親の跡を継ぐんだということで私以上に一生懸命やっていたんですが、27歳で死んでしまったものですから、そのあと私が引き受けたという形です）の努力に対して感謝状を出して下さると云うことでけじめが付けられ、東松山市で東光書院がお祭りしていた靖亜神社は平成8年に無くなりました。その時に、東光書院でお預かりしていた根津先生の遺品（フロックコートや胸像、資料など）が愛大に移管されました。

資料3ページ目の関係年表というのを私が作ってみたんですが、これは荒尾先生だとか福沢諭吉だとかいうような人達、あるいはいろんな人達の行動というものを見ていても、本を読んでみても、それが一体どういう時代にどういう風な状況の下にあったのかという時代的な感覚というのは、まあ私の不勉強のせいもあるかも知れませんが、なかなか掴みにくい。そこでこうやって並べてみたら理解が早いんじゃなかろうかということで並べ

てみました。荒尾先生に関してはオレンジ色、福沢先生については空色にして、いくらかでも理解していただければと思ったわけです。

「征韓論」について

そのあとの資料、西郷隆盛の論争最後の文章というのは葦津珍彦先生の書いた本の中にあったものですが、「西郷隆盛は征韓論という言葉を一つも出してない、彼は征韓論ではないんだ」とありました。それをなぜ征韓論にしてしまったのかというと、遣欧使節団がヨーロッパから帰ってきて、まずは西郷、あるいはその他留守の日本政府の行き方に反対するため、極端な対立関係を作り出さなきゃいけないということで、征韓論ということを言い出したんじゃないかと思うんです。これを読んでみますと、西郷さんの手紙というのは「朝鮮御交際の儀」と書いてあり、「征韓」ではないんです。「御一新の涯より数度に及び使節差立てられ百方御手を盡され候えども悉く水泡と相成り候のみならず、数々無礼を働き候儀これあり」。無礼を働いているというのは朝鮮が無礼を働いているということなんですが、「近来は人民互の商道も相塞、倭館詰居の者も甚だ困難の場合に立ち至り候ゆえ、御拠（よんどころ）なく護兵一大隊差出さるべく御評議の趣承知いたし候に付」。西郷さんが向こうへ使節として行く時に、護衛の兵隊一大隊を付けてやろうという話が明治政府で決まっているというんですね。ところが「護兵の儀は決して宜しからず」と、西郷さん自身それを断っているわけです。「是よりして闘争に及び候ては最初の御趣意に相反し候間、此節は公然と使節差し立てらるるが相当の事に之あるべく、若し彼より交を破り戦を以て拒絶致す可き哉、其意底慥（たしか）に相顕候処迄は、尽されざるに候ては、人事に於ても残る処之有るべく」。要するに軍隊を連れていって交渉に臨むなんていうことはやってはいけないんだと。誠意をもって相手を説得するんだということを西郷さんは言っているわけです。

ところがこれが結局征韓論、征韓論と、「西郷は自分が行って犠牲になるから、犠牲になったことを理由にして日本は韓国を攻めるべきだという考えを持っている」と云うふうにねじ曲げてしまったわけです。これは最初から軍隊で韓国を攻めようという意図があって、西郷さんの考えをねじ曲げたんだと思うんですが、実際にはそうではなかった。なぜ遣欧使節で帰ってきた人達と、西郷さんや留守部隊の人達との間でそういうことになってしまったかということなんですが、どうも私は、山県だとか井上馨だとかいった長州系の留守の人達に不正疑惑があったからではないかと思います。これについて江藤新平あたりが真っ向から追及し始めた。これはもう日本で、今でもそうですけれども政治的な失脚だけではなしに、命のやりとりにまで発展するというのは充分にあり得ることで、それを差し止めるためにはどうしても対立関係を強く打ち出して、西郷さんはだめだということにしなければならないということがあったのではないかと思うんです。

どういう腐敗堕落があったかと言うと、井上清さんの『日本の歴史』（中央公論社）の中に書いてあるんですが、「留守政府では最初は参議は西郷、板垣、大隈の三人であったが、明治6年4月には左院議長後藤象二郎（土佐）、文部卿兼教部卿大木喬任（肥前）、司法卿江藤新平（肥前）を参議に任じ、ついで太政官の制度「潤飾」（手直し）と称して、参議の権限を拡大した。江藤はもと岩倉、大久保派の法制官僚であったが、岩倉が外国へ行くと土佐派と結び、左院副議長から明治5年4月司法卿となり（それまでは司法卿は欠員）、同省の権限強化に熱中した」。江藤新平は非常に一生懸命動き始めたと言うんです。それでまた江藤新平は「陸軍卿山県有朋や大蔵大輔井上馨らの不正、汚職摘発に全力を上げた」。山県の不正とは何かと言うと、かつて山県有朋の部下で長州騎

兵隊で山県の部下であったが維新後は商人となって山城屋和助と名乗っていた男（野村三千三）が、兵部省御用商人として大いに儲け、生糸相場などに手を出して失敗し、その穴埋めに山県に頼み込んで、兵部省から何回かに分けて計65万円もの大金を、一品の抵当もなしに借り受けた事件で、山城屋はその金を持って生糸市場の視察に出かけると云うことでパリに行ったけれども、65万の金でパリで豪遊していたわけです。あまりにも派手に遊んでいるので、日本の外務省から行っていた官僚が、日本人がそんなに金を持って遊んでいるのはどうもおかしいからと調べてみたら、その金の出所が兵部省であった。これが追及され、陸軍の公金を使っているじゃないかと山県の責任追及になって来て、江藤新平が突いたわけです。山城屋は急いで帰国して、明治5年の12月に、可笑しなことなんですが、陸軍省内で切腹自殺をして事件を闇に葬ったと云うんです。この間の農水省大臣は自分の議員宿舎だったから、誰も見てないところで首を吊ったと云うことは分かるんですが、陸軍省内で切腹して自殺したと云うなら誰か見ていた人間がいるし、止めようと思えば勿論止められた筈です。逆に考えれば、陸軍省にノコノコ出てきた人間に責任を押し付けて腹を切らせたというのが真相じゃないかと、私なんかは思うんですけれども。

そういうことでうやむやになってしまったが、まかり間違えば山県の首が飛ぶし、有罪と云うことになれば大変な問題になっただろうと思います。そのあと江藤は井上馨についても突いているわけです。井上馨が在官中に、盛岡藩から、盛岡藩が御用商人村井茂兵衛に経営を委託していた尾去沢銅山を、政府が取り上げ、それを井上と関係の深い山口県の商人岡田平蔵に払い下げた。これに問題があると云うことで江藤新平が突いた。それが結局江藤新平の失脚、あるいは梟首にまでされてしまうような恨みをかった原因なんですが、江藤新平は佐賀県人で、うちの父もそうですし私もだいぶその血を引いているだろうと思うんですけれども、佐賀県人というのは可笑しな性格と言うか何か癖がある。ここに佐賀の方がおられたら申し訳ないですけれども。私が学校を出てからしばらく佐賀の炭鉱で働いていた時に聞かされたのは、「佐賀んもんは三度言う」。要するにしつこくて、相手の嫌がるようなことを繰り返しネチネチやるのが「佐賀んもん」だということを、佐賀県人が言ってるんだからまあ間違いないと思うんですが。どう云うことかと言うと、東京あたりでしたら「雨がザーッと降ってきた」と言う。普通でも「雨がザーザー降る」というふうに二度でとまる。ところが佐賀んもんは「雨がザーザーザーと降る」と、三遍言うと云うんです。うちの父親の性格などを見ていても、私なんか息子で嫌な思いをしたことがあるから感じるんですが、とにかく繰り返し繰り返し言って、最後に止めを刺すまで繰り返し言うようなところがあるんです。だからたぶん江藤新平もそれをやって、大いに長州藩の連中をいじめたんじゃないか。やられた方がもう我慢できなくなったんじゃないかという気がするんです。

そんなこともあって、いずれにしても単なる征韓論だとか政策の違いだけではなしに、自分の身に降りかかってきた不正疑惑といった火の粉を払わなきゃいかん。払うためには征韓論で西南戦争でも起こさなきゃいけない。もちろん西郷さんが西南戦争を起こしたのは、これは私独自の考えかも知れませんけれども、自分が兵を挙げて、不平士族を黙らせ日本を安定した国家にするためのきっかけを作る。一度はこの戦争をやらなきゃいけない。そのためにはただ単に頭ごなしに押さえ付けるだけではなく、自分が犠牲になって腹を切って、それで一件落着ということで落ち着かせたかったんじゃないかと云う風に私は思います。そんなことも勿論、不平士族の間にあっただろうと思いますけれども、いずれにしても長州の人達とかその後の日本政府の官僚やあるいは政治家の

人達には、何とかここで自分達に権力を取り戻さなければどうにもならないような、追い詰められたものがあった。それが征韓論になったり、あるいはヨーロッパ化の運動と言いますか欧風礼賛の運動になったんじゃないかと思うわけです。

福沢諭吉について

福沢諭吉の話に入りますが、福沢諭吉は大変な学者でありますし、ちょっと我々には考えられないような能力の持ち主じゃないかと思うのは、元々福沢諭吉はオランダ語の勉強をしていた。ところが横浜へ行って自分の外国語が通じないから、これじゃだめだということで英語に切り替えようと、辞書を買ってきて独学で始めた。ところが翌年になると咸臨丸で通訳として堂々と働いている。先生もおらず、辞書だけで独学で1年かそこらやった人がすぐそうやって役に立つというのは大変な能力だと思うし、我々今の日本人なんかにはとても付いていけないと感じるわけです。同時に福沢諭吉という人はものすごくいろいろ文章を書いていて、『時事新報』にも論文を沢山書いています。着眼点がすごいと思うのは、これからは人前で話ができないといけないからということで、三田で会合を開いて演説の練習をしたりしている。

福沢諭吉は、人間は勉強すればそれなりのものを作り上げる、日本人だって西欧列強にひけをとらない者になれるんだと云うことを盛んに言って、勉強しろと尻を叩いたんです。「貧富強弱の有様は、天然の約束に非ず、人の勉と不勉に由って移り変わるべきものにて」。人間は全て平等だけれども、努力しなければだめなんだぞということを言っている。それだけだったら非常に立派だと思うんですが、そのあとのところへ行くと、明治16年9月から連載された『時事新報』の社説の中で

「古来世界の各国相対峙して相貪るの状は禽獣相接して相食むものに異ならず。その事実は爰に特に枚挙するに及ばず。この点より見れば我日本国も禽獣中の一国にして、時として他に食まるるか、又は自ら奮いて他を食むか、到底我れも彼れも恃む所のものは獣力あるのみ」

と、西欧列強と同じように獣になれということを言っているわけです。その次のところもついでに見ますと、

「今朝鮮の有様を見るに、王室無法、貴族跋扈、税法さえ紊乱の極に陥りて民に私有の権なく、啻に政府の法律不完全にして無辜を殺すのみならず、貴族士族の輩が私欲私怨を以て私に人を拘留し傷け又は殺すも、人民は之を訴るに由なし。実に以て朝鮮国民として生々する甲斐もなきことなれば、露なり英なり、その来りて国土を押領するがままに任せて、露英の人民たるこそその幸福は大なるべし。他国政府に亡ぼさるる時は亡国の民にして甚だ楽まずと雖も、前途に望みなき苦界に沈没して終身内外の恥辱中に死せんよりも、寧ろ強大文明国の保護を被り、せめて生命と私有とのみにても安全にするは不幸中の幸ならん」。

ここで言っているのは、要するに大国の支配下に立った方が幸せじゃないかと。だから『学問のすすめ』で勉強に努めなきゃいけない、西欧の学問を大いにやらなければいけないということを言っているのはいいんだけれども、出来ないんだったら外国に支配されている方がむしろ幸せなのではないかと、特に朝鮮の場合について言っているわけですが、日本に対しても同じことを言いたかったんだろうと思います。ここが荒尾先生や西郷さんと、福沢諭吉あるいはビスマルクなんかの影響を受けて帰ってきた遣欧使節団の連中との違いじゃないかと思います。

私なんかはそれがどんなに贅沢三昧できるものであっても、外国の支配なんていうものは一切受け付けられない。どんなに貧乏してでも自分の力でもって生きていきたいというふうに思うんです

が、福沢諭吉はそうじゃないということをここではっきり言っている。ところが福沢諭吉先生の場合、どうも「天は人の上に人を造らず」というような「ことば」ばかりが人々の記憶の中にあるけれども、ここらあたりの福沢の本質が忘れられているんじゃないかなと思います。もうちょっとここに目を向ける必要もあるんじゃないかと考えるのです。福沢諭吉のように非常に影響力のある方がこう云うことを云うとどういう状況になって来るかと云うと、井上馨の閣議における発言

「けだし本大臣は、思えらく、これに処するの道、ただ我が帝国及び人民を化して、あたかも欧州邦国の如く、欧州人民の如くならしむるあるのみ。即ちこれを切言すれば、欧州的一新帝国を東洋の表に造出するにあるのみ」

と、要するに日本をヨーロッパの国にしなければならないんだと云うことを云っているわけです。

「本大臣の所見を以てすれば、我が人民をして欧州人民と触撃し、各自に不便を感じ不利をさとりて、泰西活発の知識を吸収せしむるにあるのみ、即ち我が国人が、文明開化に要する活発の知識、敢為の気象をそなうるに至て、我が帝国は、始めて真に文明の域にいることを得べきなり」

もっと徹底しているのは、「日本人はもっと西欧人と結婚して混血児を産み、西欧と一体化しなければいけない」ということまで言っている、と書いてあったのをどこかで見たんですが、何かちょっと日本人として、あるいはアジアの人間として、自分達の自立自尊ということを捨ててしまっているんじゃないか。西欧の文明に圧倒され過ぎてこういう言葉が出てきたのかも知れませんが、そこらあたりに荒尾精と福沢諭吉との違いが出て来ているのではないかと私は思います。

荒尾先生の『対清弁妄』序

荒尾先生の言った『対清弁妄』の序についてお話ししなければいけないと思います。日清戦争が始まる1年前に日清貿易研究所が閉鎖され、荒尾先生は帰ってこられましたが、日清戦争前にもいろいろと朝鮮問題なんかに取り組んでおられたわけです。ところが『巨人荒尾精』を見ますと、福岡の福本日南という人が井上雅二さんに話した言葉として書いてあるんですが、どうも朝鮮でいろいろ事が起こって日清間の対立があっても、日本政府がぐずぐずしていて、清国に開戦の宣言をしない。早く戦争を始めなきゃ駄目じゃないかと云うことで、対外硬派と言いますか、右翼的な人達と言いますか、そんな人達が集まって、どうしたらいいかと、神田の錦輝館というところで気勢を上げた。その時に福本日南などは朝鮮に調査のための人員を派遣しようと云うことを云い始め、福本日南自身が朝鮮に行って、向こうで計画したんですが、朝鮮人で事を起こそうというような骨のある奴はいない。日本の軍隊を直接動かすわけにはいかないから、日本の民間から壮士を100人なり200人なり連れていって事を起こし、それをきっかけに日清の間で戦争を始めさせようと云うことを考えた。その総大将には荒尾先生が一番適任だろう。元々軍人でもあるし、人望もあるし。というようなことが『巨人荒尾精』に書いてあります。

そういった関係の話が全然なかったわけではないと私は思いますし、いろいろ研究している方があるんですが、ただ実際問題として『対清意見』などを書いておられる荒尾先生と、福本日南が話をしている内容は、どうも両立しがたいように思うんです。『対清意見』というのはそんなに右から左へすぐ書けるようなものではありませんし、書かれていることは福本日南やその他の人達の意見とは真っ向から違ってきているわけですから、荒尾先生が『対清意見』を書く一方で福本日南などの朝鮮討ち入りの計画に同調するなどと云うことは有り得ません。そうすると福本日南なんかは、自分達だけで思い上がって事を起こそうと焦り、

荒尾先生を利用しようと考えていたんじゃないかと思えます。もう一つ、根津山洲先生の伝記の中には、後藤象二郎伯爵のところへ朴泳孝や金玉均などが来て、あるいは福沢諭吉のところへも金玉均が来て、いろいろ朝鮮の改革について相談を持ちかけている。それに対して福沢諭吉も何か金を用立てようというようなことで動いたという話もあるんですが、根津先生の話では後藤象二郎のところでフランスの公使かなんかに話をつけて、朝鮮改革の資金を用立ててやろうという話があったが結局うまくいかなかった。日本の政府の要請で荒尾先生などは手を引いたと、根津先生は書いています。それが後になって、福本日南のとにかく何か事を起こせば、というふうなことに繋がっていくように思えるんですが、福本日南なんかは何かというとすぐに刀をとって、朝鮮に押し出して事を起こそうとするけれども、後藤象二郎とか日本の政府とか、あるいは荒尾先生なんかはもっと大きな立場でもって朝鮮の改革というのを考えていたのではないかと思います。

それに関して「朝鮮国是大令案」という荒尾先生直筆のものが、白岩龍平さんの資料の中にあります。何枚かの罫紙に、まず自主、それから同盟、あるいは王道というようなことが書いてあり、これは白岩先生のところにあったのを私がコピーしたものです。たぶん現物は愛大に来ているはずなんです。ただ、これと『巨人荒尾精』に引用されているのとでは若干違っているところもあります。こういうものを荒尾先生が書いたということだけは事実なんです。ですから荒尾先生も朝鮮の改革について力を貸そうと積極的になっておられたことは確かなんですが、どうも私は荒尾先生や根津先生なんかがそう云う風にすぐに刀を抜いて切り込もう、とする軽挙妄動に走る筈がない。むしろ、そのような日本人の動きを一番嫌ったのが根津先生や荒尾先生でなかったかと思います。その時、事を起こそうと福本日南なんかと朝鮮でいろいろ画策した人達が、閔妃の殺害事件というのを日清戦争のあとで起こしているわけですが、荒尾先生はそのようなことには関わる筈がないと確信しています。アジアの人々と改革を一緒になってやろうと云うことはあっても、そこに違いがある。やはり荒尾先生とか根津先生とか同文書院の人達との思想の違い、あるいはずっと東亜同文書院から愛知大学へ受け継がれてきている「惻隠の情」と言いますか、維新の時に、中国がイギリスや列強から侵略され分断され、あるいは中国の人々が阿片や何かで廃人にされて行くと云うようなのを見て、本当に可哀相だと感じていた人達と、その後それを感じなくなった人達が分かれてきている。そこらあたりをきちっと整理して見ていかなきゃいけないと思います。

根津先生の「大学之道」

荒尾先生や根津先生というのは、本当の意味での日本の政治の根本思想と云うものが腹の中に出来ている人であったろうと思うんです。資料の2枚目に「大学之道」というのが載せてありますが、これはご存じのように儒教の四書五経の四書『大学』『中庸』『論語』『孟子』の中の『大学』ですが、根津山洲先生は引退されるまで、足腰が立たなくなっても、中国人のボーイの肩に支えられながら教壇に立って、この「大学之道」だけはずっと講義をし続けられたと言われております。先生の講義を聞けたのはうちの父の18期ぐらいが最後だったと思うんですが。「大学之道」というのは何かと言うと、大学の三綱領ですね。「明徳を明らかにするに在り。民に親たるに在り。至善に止まるに在り」。根津先生は古本大学によっていたということを聞いております。父もそれを盛んに言っていたんですが、朱子学ではなく古本大学の、陽明の方の学問だったと云っていました。

陽明と朱子の違いは、二番目の「親」の字を朱子学の方では「新」という字に書き替えています。それを「新」ではなく「親」なんだと云うのです。

しかも、うちの父はこれを「民に親(した)しむに在り」ではいけないんだ、民の父母でなければいけない。「民に親たるに在り」でなければいけないと云うことを、教えてくれました。「明徳」とは何かと言うと、人間が本来心の中に持っている徳であると。「民に親たるに在り」というのは民の親でなければならないという自覚です。それから「至善に止まるに在り」というのは絶対の善の境涯に立ってなければいけない。根津先生は洪川・滴水両禅師に付いて禅を学ばれ、京都時代にはずっと禅をやっておられたということなんですが、禅の立場から言うと「明徳を明らかにするに在り」とか「民に親たるに在り」とかあるいは「至善に止まるに在り」という、この「在」という字は、ただそこに有るとか無いとかいうのではなく、なりきると云うことなんだと云います。明徳を明らかにするというのは自分が明徳になりきらなければいけない。民の親になりきらなければいけない。自分自身が至善でなければいけないんだと云うふうなことを、父は根津先生から教えられたと云うことです。

そういう話をまず聞いた上で、荒尾先生の『対清弁妄』の序文を見ると、荒尾先生は儒教の講義をしたり、禅をやってどうこうという方ではないんですが、根津先生が講義をされたことと全く同じことを言っておられる。「そもそも皇道は至誠一貫の道なり」、至誠一貫の道というのは西郷さんの言う道義外交に通ずるものだと思います。根津先生の額には、「至誠神の如し」と書いてありますが、本当に誠を尽くす、誠になりきると言いますか、元々日本人というのはそうでなければいけないんだと云う事です。荒尾先生は日本の天皇制を当然考えておられるから「皇道」という言葉になるんですが、「日本人は」ということだと思います。「日本人は至誠一貫でなければならない」と云うことです。

ここで言うところの「議者(議論している人達)」とは、私は当初福本日南とか、荒尾先生の周辺にいて荒尾先生にいろいろな意見、抗議をして来た人達、と云う風に思ったんですが、どうもそうじゃない。特に福沢諭吉は「獣力あるのみ」、日本人も獣になりきらなきゃいけないと言っている。それに対して荒尾先生は真っ向から異論を唱え、それじゃいけないんだと云うことを、福沢などに大声を上げて言っているのだと思います。

また「蓋し至誠は本心の実徳なり」。至誠は人間の心の中にある徳そのものであるということから言うならば、「明徳を明らかにするにあり」、明徳が至誠でなければならないということに通ずるわけです。それで「権謀術数を以て権謀術数と闘う、是れ暴を以て暴に代うる者。此れを以て宇内の雄邦強国を六合に統べ、八荒の宏猷鴻謨を包まんと欲す」と。要するに権謀術数でもって西欧の権謀術数に如何に対応しようと思っても、これは暴力に対するに暴力をもってするというだけの話ではないかと云うことで、言ってみればビスマルクに影響されて帰ってきた人達に対する真っ向からの反論なんですね。それじゃいけないんだと云うことを荒尾先生は言っている。だから日清戦争の時に荒尾先生の意見が通っていれば、もちろん領土の割譲要求はなかった筈なんですが、その当時の日本人の気持ちは荒尾先生とは全く離れていた。どういうふうに離れていたかと言うと、満川亀太郎さんの書いている『三国干渉以後』という本の中に、満川さんが子供の頃京都で明治の童謡、三歳の童子も知らぬ者とてなかったという、李鴻章が日清戦争のあと講和の特使として来るわけですけれど、それに対して子供達が何を歌っていたかと言うと、

「リ、リ、李鴻章の鼻べっちゃ、チャ、チャ、ちゃんちゃん坊主の首切って、テ、テ、帝国万歳大勝利、リ、リ、李鴻章の鼻べっちゃ」。

そういう歌を、繰り返し子供の時に歌っていたんだと云います。それからまた京都の円山公園では、遼東半島を還付すると云うことになったわけですが、それを知らぬげに、京都の市民達は何をやっ

ていたかと云うと、「明治28年の春から夏にかけて毎日毎夜踊りの幾十隊、幾百隊、揃いの浴衣に笛、鉦、太鼓、かつらを被った仮装行列が酔いしれた千鳥足で円山公園に繰り込むのであった」と書かれています。何を歌ったかと言うと

「日本勝った、日本勝った、支那負けた、負けたら降参すりゃよいじゃないか、別嬪ないか、別嬪ないか、へちゃばかり、へちゃでも……すりゃよいじゃないか、踊らぬか、えらいやっちゃ、日本勝った、日本勝った」

というふうなことで、とにかく浮かれ呆けていたのです。日本人全員が福沢の「獣力あるのみ」とかビスマルク流の「権謀術数」に毒され切っていたのではないでしょうか。

陸奥宗光の遺稿『蹇々録』の中に、その当時の外務大臣として陸奥が非常に苦労したこととして、海軍の軍人達も勿論そうですが日本の世論も、いかに支那から領土と資金を分捕るかと云うことで舞い上がっていたと云うことを書いています。台湾を取るべきだ、あるいは遼東半島を取るべきだ、それから日本が占領した所は全部日本の領土にしてしまえとか、場合によっては支那の政府が潰れたら支那を全部日本が引き受けなきゃいけない、そういう事態も考えるべきではないか、と云うようなことまで云う人もいた。たまたま2、3の有識者は、「講和条件のあまりに過大に失するは得策に非ずと言いたる人なきに非ず。例せば谷子爵（谷干城）の如きは当時一書を伊藤総理に寄せ、縷々数千言その意味を記述せり、特にこの書中に1866年のプロシャとオーストリアの戦争の歴史を引用して、割地の要求はあるいは将来日清両国の親交を阻害すべしとまで極限せり。その説の当否を論ぜず、この間にその独特の見を発せしは万緑叢中紅一点の感なきに非ず」と。勝海舟なんかも同じような意見であったと云うことです。

陸奥宗光は荒尾先生の『対清意見』、『対清弁妄』をどうも見てないんですね。荒尾先生ほどはっきりとこれだけのことを書いて、しかも本にして、新聞社なんかにも取り上げられているというのを見てないということなんです。しかし、これは無理も無いところがあります。荒尾先生は『対清弁妄』序を達筆の自筆をそのまま載せている。当時の人であっても、そう簡単には読みこなせなかったのではなかろうかと思います。ただそういった中で、谷干城や勝海舟は荒尾先生と同じような見解であった。ところがそのような意見が押し切られてしまった結果、結局遼東還付という三国干渉を招いた。その結果について日本人は、領土の割譲要求なんかを欧州列強の真似をしてやったからいけなかったんだ、というふうに反省せず、結局、臥薪嘗胆と云うことで済ませてしまった所に、その後の日本の政治の誤りや反省力のなさというのが出てきているんじゃないのか。第二次大戦後の、場合によっては今の日米関係下の政治でもそうですが、成り行き、風潮に流されて、長いものには巻かれろ式の、見識が全く無い政治になってしまった。言うべきことはきちっと言って筋を通さなければいけないのに、誰も見識を示さない社会になってしまったのではないでしょうか。

「核支配の世界」に対する見方

これは異論があるかも知れませんけれども、私などが考えるのは、今アメリカにしろロシアにしろ、これほどの大国がみんな核を持って対峙している。その中にあって北朝鮮のたった一発の、本当に爆発するのかしないのか分からないようなものを、しかも遠く離れたアメリカがああだこうだと問題にしているのは、何かおかしいんじゃないか。北朝鮮がどこで何をやっているかというのは、小さなところですから、見つけようと思えばすぐ見つかると思うんですが。大国の自分達は持っていてもいいけれども、小さな国があとから持つのはけしからんと。現実にアメリカは世界中に核兵器を持ち込んで、やれ原子力潜水艦だ、やれ原子力空母だと核を搭載してあっちこっち大西洋から

太平洋まで遊弋していても、これは別に危害を加えてない、危険ではないから許される、ただ北朝鮮が持つのは非常に危険なんだという論理は、どう考えても納得できない。それはちょっとおかしいじゃないですか。核兵器はいけないものですよと北朝鮮に言うなら、中国に対しても駄目だし、アメリカに対しても駄目なんですよと。世界中でアメリカ以外に核兵器をこれまでに使った国はない。アメリカは、自分が広島、長崎に対して使って見せたから、今北朝鮮の核に怯えなきゃいけない。その怯えから何とか脱却するためには、アメリカがまず核を放棄して、自分達も放棄するから北朝鮮もやめなさいと、核兵器なんてものは持っちゃいけないんですよと言わなきゃいけないんじゃないでしょうか。

日本も「核の抑止力で核兵器から守られています」と言っていながら、北朝鮮に対して核を持っちゃいけませんと言うのも、理屈の上で合わないんじゃないかと思うわけです。荒尾先生や西郷さんなんかはきっと言うだろうと思うんですが、駄目なものは駄目なので、大きな国だからいいとか、既成事実はこうだからいいんだと云うことではなく、何が本質的にいけないのかを明らかにしなければならない。明治維新の時の中国あるいはアジアの国々が西洋列強に侵略されている、そう云う「侵略」は本当にいけないんだという気持ちに立ち返って、だから日本もそうはしないと云うことをアジアの国々、あるいは世界中の国々に対して言いきらなければいけないんじゃないか。そういう気持ちが根津山洲先生の精神の中にもあるし、荒尾先生の思想の中にもある。それは思いやりでもあるだろうと思います。

靖亜神社のご神宝

伊勢神宮には三種の神器がありますけれども、靖亜神社のご神宝ということで三振りの刀が当初はあったんです。これは何かと言うと、一つは根津山洲先生の持っておられた軍刀（軍人ですから）。もう一つは荒尾先生が持っておられた刀。これは造りが軍刀になっていたか、あるいはそうでないかは分かりません。それからあとは近衛家から来た短刀。この三振りの刀が靖亜神社の宝物と云うことになっていたんですが、今は行方が判りません。根津先生の側近中の側近で、靖亜神社を作る時にも中心になって働かれた山田岳陽先生が述べておられる中に（『支那』26巻12号）、根津家へ行って根津栄子刀自に、何か一つ靖亜神社の宝物としてお譲りいただけないかとお願いした時に、奥様が「これは根津が生前常に佩用していた軍刀です。ただ、根津が言うには、これは日清日露の戦争の砲弾の下をかいくぐってきたけれども、未だかつて血塗られたことのない刀であると。だから靖亜神社の宝物としてふさわしい」と云うことを言われ、山田岳陽先生は感激してこう述べておられます。

「流石にあの秋霜烈日の如き一面を有せらるる根津先生が、幾度と無く兵馬の間に馳駆せられ、危難の間に出入せられたるに拘わらず、至る所に仁民愛物の至情を留められたる事蹟を回想し、且つかかる貴重なる御家宝の存する事は、先生のご生涯を通じて東洋永安の大経綸を定められる所以の大精神の現われであることに感激し」

後日、この佩刀を拝受したと云います。これは靖亜神社を特集した雑誌『支那』に載っていることです。この人間の生命を大切にすると云う根津先生のお気持ち、この日本人が持っている本来の気持ち、人間の思いやりの気持ちに素直になると云うことがまず靖亜神社の精神でもあるし、あるいは同文書院の精神でもあったろうし、三先覚の精神でもあったのではないか。これは儒教の思想でもあろうと思いますが、そう云ったところに帰ることが一番大切なのではないでしょうか。

最初に結論めいたことをお話ししましたので、ちょっとまとまりがないかも知れませんけれども

ここらあたりで話を終わらせていただきたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

【司会】 ありがとうございました。今日の前半は靖亜神社と、お父様である村上徳太郎先生のこと、そのあと諭吉と荒尾精、及びそれを巡るお話でしたが、どちらについてでも結構です、ご質問などありましたらどうぞ。

【大島】 愛知大学退職者の大島隆雄と申します。いろいろ今まで知らなかったことをお教えいただきまして本日は大変ありがとうございました。私はこの頃愛知大学の前身校と言われるようになった東亜同文書院について、一年近くいろんな本を読んでおりますが、まだまだ分からないところが大変多く、先生が書かれた『回光』を二度ほど読ませていただいて一つお聞きしたいことがございます。荒尾精が『対清意見』で書いていることで、おそらく『対清意見』を現物で読めば分かることかも知れませんが、読んでおりませんのでお教え願いたいと思います。「1、朝鮮の独立を確かなものとする事」、これは分かります。「2、日本が清国に宣戦布告をした真意を清国国民に知らしめる事」、荒尾はどういうふうに説明しようとしたのかということが分かればお教えいただきたいと思います。それから「3、清国との通商関係において日本が欧米諸国に比して不利な立場に置かれている事を改める事」ということですが、これは少し微妙なところがあると思います。清国が当時欧米諸国から不平等条約を押し付けられており、その不平等性を回避するという内容ならば正当性があると思うんですけれども、日本も欧米諸国と同じように、例えば輸入関税を非常に低く押さえる（半植民地関税）といったことを要求しているのかどうか。私は荒尾の正義感からしてそうではないように思うんですけれども、この辺について、もし分かればご説明いただきたいと思います。

【村上】 お答えいたします。「1、朝鮮の独立を確かなものにする事」というのはこの通りですが、「2、日本が清国に宣戦布告をした真意を清国国民に知らしめる事」、この「真意」というのは結局のところ第1点だろうと思うんですけれども、朝鮮の独立を確かなものにするということ、そのために日本は清国に対して宣戦を布告したんだということを荒尾精は言いたかったんだと思います。「3」の点ですが、私もその間の通商の関係をはっきり申し上げるだけの知識はありませんけれども、ただ私が思うには、清国が西欧諸国から非常な不平等条約を押し付けられたという点は確かにあります。それと同時に、日本も欧米諸国に対して不平等条約を改めさせなければいけないということで、根津先生も荒尾先生も、改めさせるためには清国との戦争は文明的な戦争でなければならないと言って、そのために日清貿易研究所の卒業生とか、あるいは中国語のできる人達を大勢動員して戦争に参加させているわけです。ただ西欧との関係はそうであっても、こと清国と日本との関係においてはどうだったのかと言うと、日本はやはり清国に非常な不平等条約を押し付けているところもあったんじゃなかろうかと思うんです。ただしそれが先生のおっしゃるように、日本を欧米諸国と同等に扱えという意味だったとするならば、荒尾先生の真意がちょっとここでは曲がってきているかなというふうにも思いますけれども、荒尾先生はそこまでは考えておられなかったんじゃないか。あるいは日本はどこか清国に対しては不平等な条約を、これは徳川時代からの引き継ぎだろうと思いますが、そういったものがあったんじゃないかというふうに私は考えております。ご専門の方々のご研究に俟ちたいと思います。以上です。

【大島】 ありがとうございます。

【司会】 その他には。

【藤田】 どうもありがとうございました。前半の靖亜神社のお話との関係で私もちょっと思い出したことをお話しします。さっき大野さんの話が出てまいりましたけれども、私は東亜同文書院の旅

行記について80年代の後半からいくつか論文を発表するようになりましたが、当時は反応がほとんどなかったんです。ベルリンの壁の崩壊が89年ですからまだイデオロギー時代とでも言いますか、そういう点で言いますと何の反響もないままに、しかし私としてはあの膨大な中身に足を突っ込んだことがいいのかどうか、どうしたらこれが成果になっていくのかと、とまどいながらやっていました。その頃村上さんのところへもお参りに行ったことがありまして、特に阿部（弘、39期）さんが非常に熱心でした。何度もご案内をいただいて。その過程で先ほどの順造（山田）さんのお宅へ連れて行っていただいたことがあります。初めてそこへ大学の者として入れていただいてびっくり仰天しました。すばらしい資料がたくさんあり、あの方の膨大な研究成果がファイルされていた。と同時に、いろんな大学がこれを欲しがっているという話もありまして、阿部さんとしてはぜひ愛大に持っていって欲しいんだという話を盛んにされていました。

ちょうどベルリンの壁の崩壊直後に私はようやく少しずつ研究成果が実って、東亜同文書院の人達の大旅行の全貌を、初めて80ページぐらい書いたんです。そうしたら学内の一部とか、特に学外の人に非常に関心を持っていただいた。その時大野さんが学内におられ、「44期の卒業生だけれどもワシはもう書院には何の関心もない」とずっと言われていました。「大野さん今度これを書いたんだけど、一回読んでみてよ」と渡したら、2日か3日後にえらい血相を変えられて、「書院の方々がこんなことをやっておられたとは知らなかった。これからは書院のことを一生懸命やる」と言われたんです。その頃ちょうど私も埼玉のほうからまたご案内を受けていたから、「今度大野さん行きませんか」と。ぜひ阿部さんとかその他の人にも、愛知大学のために何とか資料を寄贈していただけるように、大野さんは卒業生なんだから僕よりも強く言えるはずだ、とお願いしたら「行く」と言われて、そこで先ほどの出会いがあったんです。先ほどのお話ではありませんが、靖亜神社が巡り合わせてくれたのかも知れません。あの時に大野さんがうまく言ってくれなかったら、今頃どうなっているのかなあという気がします。亡くなられてしまったから過去の話をしてもいいかなと思うんですけれども、そういう経過がありました。大野さんには感謝しております。

【司会】 有難うございました。関係する方々に直接証言をしていただいて埋められるところがたくさんあって、今の藤田先生のお話も、私の頭の中でぽっかりしていたのが段々今日の村上さんのお話と同時に重なってはっきりして来ました。やはり愛大の中では、酒を持って本間先生からの指示で山田純三郎先生のところに行ったと大野さんはおっしゃった。おそらく愛大が出来た当初21年か22年、山田純三郎さんがちょっと遅れて日本へ帰られましたから、その頃本間先生が事務の大野さんに「お前行ってこい」と言われて行った。大野さんは呉羽の学生として愛大の創立には加わったものの、その後愛知大学の職員の立場で、必ずしも同文書院そのものを見直していたわけではないなと。藤田さんの今のお話で、改めて靖亜神社に行かれた。私も大野さんのこと、あるいは藤田先生のことなどから触発されて、センター立ち上げということを勝手に自分の使命みたいに思い込み、藤田さんをはじめ他の方々と一緒に東亜同文書院大学記念センターを立ち上げたわけでありますけれども、失われたリンクの中のその部分が蘇ってまいりました。今の藤田先生のお話も大変貴重で、今日のご発言で記録に残りますので大変有り難いと思っています。他に何かございますか。

【松井】 愛知大学卒業生の松井と申します。個人的な関心があったんですが、四書五経の『大学』を説明されたのを聞いて思い出したのは、夢野久作が『大学』を学校で習って、うちで「民に親しむにあり」というところを暗誦していたら、突然

父親の杉山茂丸がずかずかと入ってきてボコンと頭を殴り、「ばか、これは違う。『民を親にするにあり』と読むんだ」という言い方をした。政治家や王様というのは民を敬って政治をしなければいけないということを叩き込まれたという話でした。このような思想が九州の一部地方で、権藤成卿とか葦津珍彦には残っているんじゃないかと鶴見俊輔さんが書いています。ちょうど今日の荒尾精のところにもう一つ皇国という言葉があり、これはたぶん日本の国学の影響もあるんですが、別の尾張関係の郷土史の資料の一節にはそういう皇国とか引いてあるんですけれども、最後に「三皇五帝」という支那の伝説の王様の話が引いてあって、日本だけではなく漢字を使う人達全般に理解できるようにという説明を含んでいると思います。そういう思想を根津にしろ荒尾にしろ、いろんな人達が共通に持っているような気がしたんですけど、漢学関係での繋がりというものを何かご存じだったら教えていただきたいと思います。

【村上】 今の「民を親にするにあり」というふうに読むという話ですが、うちの父親などは「民の親たるにあり」ではなく「民に親たるにあり」だというふうに繰り返し言っていたので、これはそれなりの思い入れがあるんだろうと思っているんですが、「民を親にする」という考えは私は初めて知りました。ただ、いずれにしましても程伊川や何かの話の中では「民に親しむ」というふうなことだったんではないかと思うんですが、それを「民の父母である」と。帝学と為学がありまして、帝学の立場から言うと、やはり「民の父母」でなければいけないんじゃないかと。しかもうちの父は禅をやっておりましたので、禅的なと言うとおかしいんですが禅坊主くさい表現を何かとするんですが、これは「民の父母」であると、父母になりきるんだということを言っておりました。今言われたような「民を親」という読み方は、私も不勉強で今までちょっと触れたことがなかったものですから分かりません。まあ根津先生などは「民に親しむ」というふうにあるいは読んでおられたのかも知れません。ただしうちの父親は「民に親たるにあり」と読めというふうに言っておりましたので、私もそう申し上げました。

【渡辺】 愛大卒業生の渡辺と申します。早く死んでしまった私の父親が非常に大衆演芸が好きで、いろんな浪花の寄席の講談本なんかの原稿を集めておりました。その中で明治・大正のいわゆる政治漫談でかなり有名な政治評論家であった伊藤痴遊という人が、大西郷と大アジア主義の関係を語っている部分がありました。戦争で燃えてしまいましたがその内容は、西郷が壮士たちを集めて中国問題の討論会をやった。そして最後に西郷隆盛が口を開いた時、「おはん達は日本人の立場で意見を言っている。日本人の立場でごちゃごちゃ言っていても何にもならない。本当に中国が好きだったら、今から日本人であることをやめて全部中国大陸へでも行け」というふうに論したそうでございます。この流れがその後の流れなんだと政治漫談の伊藤痴遊が言っていると言うんです。本当か嘘かは知りませんが、何かそんなような雰囲気があったんじゃないかと思います。

もう一つ先生が『学問のすすめ』と福沢諭吉の関係を言われておりますが、福沢諭吉は晩年先生がおっしゃるように『脱亜論』を唱えたり、いわゆる帝国主義的な欧米と日本を同じにしようと。日本はアジアの盟主になろうというような変な思想が入って来たと。殊に金玉均なんかを支援したのはこの東三河の地区でも非常に盛んで、一時はここに金玉均がいた。これは福沢の援護のもとにあったと言うんですが、『学問のすすめ』の中に福沢諭吉は「理のためにはアフリカの黒奴にも恐れ入り、道のためにはイギリス・アメリカの軍艦を恐れず、国の恥辱とありては日本国中の人民一人も残らず命を捨てて国の威光を落さざるこそ、一国の自由独立と申すべきなり」と述べております。明治の初めに福沢が『学問のすすめ』を書いた時は、まだそんな帝国主義や侵略思想はなかっ

たと思うんですが、如何なものか先生のご意見をお伺いしたいと思います。

【村上】 伊藤痴遊の漫談の中に西郷隆盛のそういう話があったということですが、私はその話は存じません。昭和になってからかも知れませんけれども、佐藤垢石の新聞小説の中に荒尾精と西郷隆盛との関係を話題にしているものがあり、西郷さんのうちで奥さんがくどくどと愚痴っていた。「うちはもう屋根が破れて雨漏りがして困る。何とか少しお金を工面してくれないか」。その時荒尾精は西郷さんのお宅の書生で、障子の陰から聞いていたら西郷さんが、「日本という国が雨漏りしている時に、何で自分のうちのことぐらいを言うんだ」と奥さんを諭しておられたと。私はこれは小説家の作り話だろうと思います。荒尾精が西郷さんの書生になった事実はありません。『回光』にもちょっと書いたんですが、大アジア主義というのは竹内好先生なんかもいろいろ分析して書いておられますけれども、非常に曲折があり、人によっていろいろ問題の取り上げ方が違っているんだろうと思うんです。それと時期的なことでも違ってきているんじゃないかと思います。それをむしろ孫文あたりは直截に切って捨てたように「どっちなんだ」と。「西欧の番犬になるのか、あるいは東洋王道の干城になるか」と問いかけている。荒尾先生なんかに対してそういうことを言ったら王道一本槍ということで答えられるだろうと思うんですが。日本人が言う大アジア主義もいろいろで、頭山満の玄洋社とその後の玄洋社とは違っているだろうと思いますし、それ以外のいろんな方々がアジア主義を唱えて、あるいはそれに「大」を付けたりしているというのも、いろんな方々がいろんな立場でもって話をしているので、一人一人分析していかないと分からないところがあるんじゃないかと考えております。荒尾先生の大アジア主義は本当のアジア主義の原点であろうと私は思っている、ということだけは付け加えさせていただきたいと思います。

そして福沢諭吉には帝国主義とか侵略主義とかの意識は無かったと思いますが、日本人を叱咤するために「到底、我も彼も恃む所のものは獣力あるのみ」と云った福沢の言葉が、日本人にどれだけ悪影響を残したかは、知っておかねばならないことではないでしょうか。

【司会】 これで講演会のほうは終了させていただきます。今日は長時間貴重なお話を承りましてありがとうございました。

村上氏講演の添付資料

1

「学問のすゝめ」「脱亜論」と荒尾精先生の思想

講演資料

東亜同文会蔵写真

東方斎荒尾精（一八五九～一八九六）

安政六年四月十日、尾張藩士義済の長男として、現在の名古屋市西区台所町一の一に生まれる。幼名市太郎、後に義行と改め更に精と改める。父は家禄を奉還、上京して麹町に住み、商人となるも生活は苦しかった。麹町警察署警部だった鹿児島県人菅井誠美家の書生となり、学校に通わせて貰い、漢英教の他フランス語などを習う。明治十一年陸軍教導団に入り、大阪鎮台に赴任、選ばれて十三年陸軍士官学校に入る。山洲根津一と邂合、生涯の盟友となる。十八年参謀本部支那部付となり、十九年命により渡清、漢口に楽善堂支店を開き、支那の実情を調査。二十二年四月帰国後、日清貿易研究所の創立に取り掛かる。明治二十六年六月、89名の卒業生を出して閉鎖。28年8月の日清戦争には研究所の卒業生職員など91名が通訳として参加。荒尾や根津の「条約改正問題に取り組む為には戦争は文明流に行わねばならず、殊に無辜の良民との間の衝突を避けるために、意思疎通を図る為の通訳が必要である」と云う呼びかけに応えたものである。一方で精は「対清意見」の発行の手筈を整えると京都に隠棲。続いて反論非難に応えて「対清弁妄」を出版。精の主張にも拘わらず、日本は遼東半島、台湾と二億両の賠償金を獲得。三国干渉を招く。気を取り直した精は「対清通商意見第一」を発表。東方通商協会を起そうとして台湾に渡り、黒死病（ペスト）に罹り明治二十九年十月三十日逝去。「ああ、東洋が……」の一語を残したと云う。行年38歳。

公開講演会

講 師　村上武（東光書院院長）

日 時　2007年6月30日（土）　13：30～15：30

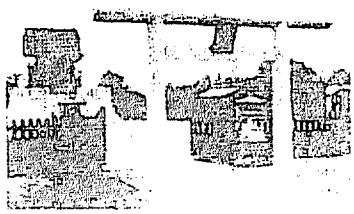
会 場　愛知大学豊橋校舎　研究館1階第1・2会議室

2

1　靖亜神社について

大学之道
在明明德
在親民
在止於至善

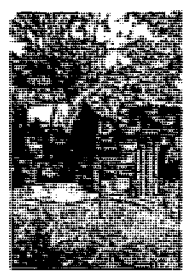
根津先生が認められた「大学之道」の三綱領

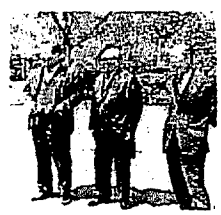


上海東亜同文書院内の神社
1935(昭和10年)～37(12年11月)

埼玉県東松山市の神社
1955(昭和30年)～71(昭和46年)

同
71(46年)12月～96(平成8年)





靖亜神社縁起

日本が明治維新(一八六八年)を成し遂げた時、アジアの地は西欧列強によって分割植民地化が進められておりました。

この時、中国を保全し、日中提携して共存共栄を図り、よってアジア諸民族の独立と繁栄を実現しようと活躍した方がありました。靖亜の三先覚と呼ばれる

宮山近衛篤麿公
東方斎荒尾精
山洲根津一

のお三方であります。三先覚の目指したところは、

「一不義を行い、一不辜を殺して天下を得るも為さざるなり(たとえ少しの道に外れた行いや、罪なき人をただ一人殺す事で天下が得られるとしても、断じて行わない。)」

という東洋の王道思想を世界政治の指導原理として、平和を実現することでありました。

靖亜神社は、昭和十年、中国上海の東亜同文書院の校内に、この靖亜の三先覚を主神に、靖亜の志に殉じた方々を従祀して創建されました。

戦火に焼かれ、敗戦によって中国の地を離れた靖亜神社は、昭和三十年四月、こ武蔵野の一角に遷座再建され、アジア諸国諸民族の安定繁栄を願い、世界に平和が実現することを希求する人々の心の拠り所として蘇りました。

毎年四月に奉斎されてきた例大祭には、吉田元総理をはじめとして、各界多数の方々が参列され、世界平和の実現、アジア諸国民の平和と繁栄、日中友好の永遠なる発展等を祈念して活躍しておられます。

靖亜神社の春の例大祭は「天下に明徳を明らかにする」ために、『明徳祭』と呼ばれています。

昭和六十年四月

靖亜神社祭主　村　上　武謹識

靖亞神社合祀者芳名

靖亞神社の御柱は近衛霞山公、荒尾東方齋先生、根津山洲先生の御三方であらせられるが、同神社に合祀せられた對支先覺者は東亞同文會を始めとし、日清貿易研究所、東亞同文書院出身者並に同門在學中不幸中途にして逝去せられた方々六百四十六名である。今左に其の芳名を掲げて追憶の微忱を表する。

日清貿易研究所創立並に同文會經營に關し特別援助者

恩人　侯爵　松方正義
同　大將　川上操六

東亞同文會創立功勞者

顧問長　子爵　長岡護美
評議員　岸田吟香
幹事長　陸實
幹事長　池邊吉太郎
評議員　佐々友房
顧問主任　内藤虎次郎
編纂主任　成田興作
評議員　原口聞一
會長　侯爵　鍋島直大
會長　子爵　青木周蔵
評議員　井手三郎
幹事長　佐藤正
顧問長　鶴島安正
幹事　恒屋盛服
幹事　國友重章
同　安東俊明
同　國田和五郎
同　野澤綾一
同　山口正一郎
同　江藤哲三
同　江藤新作
同　佐藤宏
顧問長　男爵　伊集院彦吉
同　侯爵　細川護成
同　岸經英麿
相談役　犬養毅
評議員　床次竹次郎

日清貿易研究所職員

教頭　藤飼森次郎
幹事　小山林作
同　西村忠四郎
同　宗方小太郎
支那語教諭　御幡雅文
時文教諭　草場藤三郎
商品學教諭　井澤彦三郎
支那語教師　山内嘉
同　中西正樹
支那語教諭　片山敏彦
外　十二名

日清貿易研究所關係者

日清役殉難者　鶴崎三郎
鎮州東文學堂教習　中西重太郎
伊藤行
蒼陀山行者　高見武夫
雲南旅行者　廣岡安太
甘肅旅行者　藤島武彦
日清役殉難者　石川伍一
同　山崎蓋三郎
外　三名

日清貿易研究所卒業生

猪田正吉、樋内友次郎、藤崎秀、福原林平、外　五十三名

南京同文書院功勞者及び生徒

院長　佐藤正
幹事　山田良政
教授　西田龍太
事務員　曾根原千代三
會計係　中村敏義
生徒　西本省三
外　五名

東亞同文書院卒業生

坂東宋三、松井小右衛門、横山東月、野村正、大間知秀之助、山田藤治、外五百七名

「支那」第二十六卷第十二号より

3

2　関係年表～1

西暦	和暦	出　来　事
1835	天保 5	1/10　福沢諭吉生まれる。（大阪、中津藩蔵屋敷で）
1859	安政 6	[illegible] 諭吉（26 歳）　横浜見物の際オランダ語が通用しないのを知り、英語へ転向の決意をし、ホルトロップの英蘭対訳辞書により独学で英語を学ぶ。 10　安政の大獄（橋本佐内、頼三樹三郎、吉田松陰ら死刑）。
1860	万延元	1/19　諭吉、咸臨丸に乗り組み浦賀出港、37 日を経てサンフランシスコ到着、3/19 サンフランシスコ出港、ハワイを経て 5／5 日帰国。ウエブスター辞書を購入。 3/3　桜田門外の変（水戸浪士井伊直弼を刺す） 5/2　根津一生まれる（山梨県東山梨郡日川村・根津勝七の次男、幼名傳次郎）
1862	2	幕府の御雇翻訳方として遣欧使節に随い、1/1 長崎出港、インド洋を経て紅海に入り、スエズから鉄路エジプトのカイロに至り、地中海を渡りマルセイユに着く。以後、フランス、イギリス、オランダ、ドイツ、ロシア、スペイン、ポルトガルを歴訪、先進文明諸国の実情に接し、その文物制度を調査の上、12/11 帰国。
1867	慶応 3	1/23 諭吉幕府の軍艦受け取り委員長小野友五郎の一行に加わり、再び渡米、6/27 帰朝。滞米中、多くの原書を購入、携え帰る。滞米中不都合の廉有りとの理由で謹慎を命ぜられる。
1868	明治元	1 戊辰戦争。3 西郷・勝の会談（江戸無血開城）。 諭吉 35 歳、4 月新銭座に移り、塾の名を慶応義塾と名づける。授業料の制度を創める。 6 神田孝平・柳河春三と共に新政府へ出仕の命を受けたが、病と称してこれを辞退。8 幕府退身の事が許可される。江戸新政府からしばしば出仕を命ぜられたが固辞して受けない。 9 明治改元（一世一元の制）。
1871	4	7 廃藩置県。日清修好条規。 朝鮮大院君、排外鎖国を声明。[illegible] 11 米欧派遣特命全権大使岩倉具視ら横浜出港。
1872	5	2「学問のすゝめ」初編刊。　6/5 マリア・ルーズ号横浜入港、中国人奴隷脱走。英国代理公使ワトソンの勧めもあって副島外相が船長の裁判を行う。ポルトガル、フランス、プロシアがこれに反対、副島は米英公使の支持を得て裁判を続行。中国人奴隷を全員解放。（正義人道の副島外務卿の名を得る） 4 江藤新平司法卿となる、権限強化。陸軍卿山縣有朋や大蔵大輔井上馨らの不正汚職摘発に全力を上げる。（山縣・山城屋和助のパリでの豪遊の金が陸軍の公金だった件。井上・盛岡の尾去沢銅山を山口県商人岡田平蔵に払い下げた件）12 山城屋は急遽パリから帰国し、陸軍省内で割腹自殺。
1873	6	1 六鎮台を置く（東京、仙台、名古屋、大阪、広島、熊本　88 年に師団と改称）。徴兵令布告。 8 閣議、参議西郷隆盛の朝鮮派遣を内定。[illegible] 9 遣米欧大使岩倉ら帰国。（三条実美の早期帰国要請による。）10 岩倉らの意見により、朝鮮遣使を無期延期（征韓派の敗北）西郷隆盛・副島種臣・後藤象二郎・板垣退助・江藤新平ら参議を辞職。 「学問のすゝめ」二編・三編発刊。
1874	7	1 慶応義塾内に幼稚舎を設立。京都に慶応義塾分校を設ける。2「民間雑誌」創刊。「学問のすゝめ」四・五・六・七・八・九・十・十一・十二・十三編発刊。 1 副島・後藤・江藤・板垣ら 8 人「民選議院設立建白書」を左院に提出。2 佐賀の乱。4 江藤新平処刑され晒し首となる。閣議、琉球島民殺害を理由に台湾出兵を決定。（5 月上陸、12 月撤兵）木戸孝允、出兵に反対して参議を辞職。
1875	8	1～2 大久保・木戸・板垣、政治改革で意見一致（大阪会議）。3 木戸・板垣、参議に復帰。4 元老院大審院を置き、漸次立憲政体を立つるの詔発布。5 樺太・千島交換条約。9 江華島事件起きる。 3 学問のすゝめ・十四編発刊。「文明論之概略」刊。
1876	9	2 日朝修好条規（江華島条約）調印。3 廃刀令。 4「家庭叢談」を「民間雑誌」と改題し週間新聞として発足。「学問のすゝめ」十五、十六、十七編発刊。9 元老院に憲法起草を命ず。10 熊本敬神党の乱、秋月の乱、萩の乱。この年農民一揆 26 件。
1877	10	2 陸軍大将西郷隆盛、鹿児島に挙兵。熊本城を包囲（西南戦争始まる）4 熊本城の包囲解除。木戸孝允死去。9 西郷隆盛（51 歳）ら鹿児島で自刃（西南戦争終わる）
1878	11	5 大久保利通（49 歳）暗殺さる。8 近衛砲兵隊で反乱（竹橋騒動）陸軍卿山県有朋「軍人訓戒」令達。12 参謀本部設置（本部長に山縣有朋）。[illegible]
1879	12	[illegible] 1/15 諭吉、東京学士会院の設立に当たり初代会長に選ばれる。1 東京府会において副議長に選ばれるが受けず。3 琉球に軍隊出動、4 琉球藩を廃し沖縄県とする（琉球処分）。
1880	明治 13	[illegible]　4 集会条例制定。7 井上馨外務卿、条約改正案を各国公使に公布。11 工場払下げ概則公布（官営工場の払い下げ始まる）。12 元老院、日本国憲案を天皇に提出（不採択）。12 諭吉、大隈重信邸にて伊藤博文、井上馨と会見、3 人から政府の機関新聞紙発兌の引き受けを懇請される。
1881	14	1 井上馨を訪問、新聞紙発兌の依頼を辞退。国会開設の意のある所を打ち明けられ、政府の英断を再び協力を決意。3 参議大隈重信、国会開設意見書を提出。7 北海道開拓使官有物払下げ事件起こる。 10 明治 14 年の政変、官有物払下げの中止。大隈重信の免官（福沢諭吉が大隈の謀主となり政府転覆を企てたとの風評）。憲法欽定方針を御前会議で決定（薩長藩閥政府確立）。明治 23 年国会開設の詔。松方正義、参議兼大蔵卿に就任。
1882	15	1 条約改正各国連合予議会開始（7 月まで 21 回）。3 伊藤博文ら憲法調査のため渡欧。（～83 年 8 月）

2　関係年表～2

西暦	和暦	出　来　事
1882	明治 15	3/1 諭吉独力で時事新報を創刊。（時事大勢論、帝室論、徳育如何、兵論など発表）。 冬、精、陸軍士官学校を卒え、陸軍歩兵少尉に任ぜらる。（24 歳）陸士卒業と同時に退役して清国に渡りたい強い希望を持っていたが、菅井誠美他に説得され思い止まる。**7 壬午軍乱。8 朝鮮と済物浦条約調印（公使館駐兵権）10 東京専門学校創立（後の早稲田大学）**
1883	16	春、歩兵第十三連隊付に補せられ、熊本に行く。遣清留学生御幡雅文に遭い官舎を共にし余暇に支那語を習う。11 鹿鳴館開館式。
1884	17	**5 群馬事件（自由党員・農民蜂起）。7 華族令（公、侯、伯、子、男の五爵）。9 加波山事件。10 秩父事件。12 甲申事変（金玉均の変、朝鮮独立党の郵政局事件、金玉均、朴泳孝ら日本亡命。この時諭吉は金玉均を応援、横浜正金銀行から 17 万円の借款を斡旋。）。清仏戦争（～85 年）。11 アフリカ分割に関するベルリン列国会議（～85 年）。12/4 金玉均高宗を擁してクーデター決行、日本も竹添進一郎公使を中心に協力。12/6 閔妃・清国軍に出動依頼、袁世凱軍 1500 名、日本軍 400 は撤退。** （この時王宮内の女性を含む日本人が清国軍により殺害さる。諭吉は戦争による決着以外にないと日本政府の尻を叩き始める。）
1885	18	**1 漢城条約（甲申事変の賠償）。3/16「脱亜論」を時事新報に発表。4 清国と天津条約調印（朝鮮からの同時撤兵、派兵の同時事前通告）8/13「朝鮮人民のためにその国の滅亡を賀す」時事新報に掲載。（「治安を妨害する」として時事新報は 8/15 から一週間の発行停止処分を受けた後、「朝鮮の滅亡はその国の大勢に於て免るべからず」2 回分を書く、社説掲載できず）。**精、この年、参謀本部支那部付となる。**12 内閣制度制定（第一次伊藤博文内閣成立）。宮中に内大臣を設置。**
1886	19	精 28 歳、春、命により渡清。上海で岸田吟香に会い、後援を得て漢口に楽善堂支店を設ける。支那内陸部の実情調査のためここを拠点として同志を集める（井深彦三郎、高橋謙、宗方小太郎、山内厳、浦敬一など十余名）。**5 井上馨、条約改正本交渉。11 国際赤十字条約に加入。**
1887	20	**6 伊藤博文、憲法草案の検討開始、司法省法律顧問ボアソナード、条約改正に関し意見書提出（外国人判事任用批判）。7 農商務相谷干城、外国人判事任用など批判し辞職。政府条約改正会議無期延期を各国に通告。8 条約改正案反対運動高揚。9 井上外相辞任。**
1888	21	**2 大隈重信、外相に就任。6 枢密院で憲法草案審議開始。11 大隈外相、条約改正の交渉開始。メキシコとの通商条約（最初の対等条約）。**
1889	22	**2/11 大日本帝国憲法発布。皇室典範、衆議院議員選挙法、貴族院令など公布。森有礼文相暗殺（42 歳）。黒田清隆首相、地方長官に超然主義を訓示。**4 精帰国、参謀本部に「復命書」提出。**4 大隈外相の条約改正案、ロンドンタイムスに掲載され、世論沸く。10/18 来島恒喜の投弾により負脚を失う。来島はその場で自刃。条約改正を延期。**精、根津と相談しながら日清貿易研究所の設立に取り組み、約 1 年間全国を遊説して青年を集める。**10 朝鮮、防穀令事件（対日穀物輸出停止）～93 年。**
1890	23	**1/27 慶應義塾大学部が設置され、文学・法律・理財の三科を置く。7 第 1 回衆議院議員総選挙。** 9/2 二百名近い日清貿易研究所の職員生徒が精に引率され、上海に渡り、9/20 開校式を行う。 **11/25 第 1 帝国議会召集。第一次経済恐慌起こり、経済界不況。**日清貿易研究所の運営は、生徒他の病者続出と財政難が重なり、精は資金繰りのために後事を根津一に任せて帰国、12／28 に金庫の中に一円数銭だけであったと云う。上海楽善堂の信用を借りて資金繰りを為す。この間に生徒に動揺が生じ、去りたいと云う者約 30 名に退学を命ず。**11 哥老会揚子江中流域で暴動。**
1891	24	**5 大津事件（ロシア皇太子大津で警備の巡査に切り付けられる）。**
1892	25	**2 第 2 回総選挙（松方内閣の選挙大干渉）5 第 3 議会召集。選挙干渉問責決議案可決。**根津、「清国通商総覧」の編成に着手、8 月に刊行（2000 ページに及ぶ）。夏、哥老会の騒擾、長江一帯で猖獗を極め、沿岸各埠頭の在留外人が難を避けて上海に集まる。上海在留外人協議し、義勇隊を組織し備えようと決定。研究所の生徒にも参加を求める。研究所は参加を断る。哥老会の乱が上海にまで及ぼないを確信していたからではあるが、外国人からは哥老会に通じているのではないかと云う疑念さえ懐かれるに及んで、一書を義勇隊長に送って、研究所の真意を示すと、かえって研究所に対する信頼が深まって、諸新聞が、礼あり義ある態度を賞賛した。
1893	26	**2 衆議院、内閣弾劾上奏案を可決。政府と議会の和衷協同を求める詔書。5 防穀令問題、朝鮮政府賠償支払いで妥結。**6 日清貿易研究所は約 3 ヵ年の研修を終えて 89 名の卒業生を送り出し、閉鎖される。同時に日清商品陳列所を起す。卒業生はここで実習を為す。精は東方通商協会の設立を企図。 **10 大日本協会結成（大井憲太郎ら、内地雑居反対、条約励行を提唱）11 対外硬運動活発化。**
1894	27	**3 朝鮮で東学党蜂起。（～6、甲午農民戦争）。6 日清両国、相互に朝鮮出兵を通告。**6/6 東京錦輝館に於て対外硬派大懇親会開催。東邦協会は委員を朝鮮に派遣して実情を目撃する事に決し、福本日南がその委員に選ばれた。6/12 夜、福本日南は精と会って局面に対処する方略を協議したと云う。 **7/16 日英通商航海条約調印。第一次条約改正（法権の回復）。7/23 日本軍、朝鮮王宮を占領。7/25 日本艦隊、豊島沖で清国艦を攻撃。**福本日南など日本から壮士を動員して事を起す事を計画。その総大将に荒尾精を考えていた、と云う。（朝鮮国是大令案）。**8/1 清国に宣戦布告（～95 年 4 月、日清戦争）。9 大本営を広島に移す。黄海海戦。9/29** 精、「対清意見」の発刊の手筈を整えて京都に籠もる。**11 旅順占領。**12 精、「対清意見」に対する疑問書等に答える為の執筆を企図（宗方大亮宛書簡）。
1895	28	**2 威海衛占領、清国北洋艦隊降伏。3 李鴻章来日、下関講和会議開催。**3/15「対清弁妄」発行。**4/17 日清講和条約（下関条約）調印。4/23 三国干渉（露独仏 3 国、遼東半島還付を要求。9/12「対清通商意見第一」発行。10 日本軍、ソウルで大院君を擁してクーデター、閔妃を殺害。11 遼東半島還付条約調印（還付報償金３０００万両）。**
1896	29	1 上海に赴き清国の実情を視察、大官巨紳と会談、歓迎を受ける。2 帰国後貴族院議員などに演説。8 新領土及び南清諸港視察の目的で鹿児島・琉球を経て台湾に向かう。9 台北に至り紳商協会を創立。台南より澎湖島、厦門、福州、香港を巡覧せんとして、未だ出発しない間に黒死病（ペスト）に罹り、病む事 5・6 日で 10/30 台北にて没す（「嗚呼、東洋が……」の一語を残す）。

5

3　西郷隆盛の論争最後の文章

対韓使節について、西郷本人が書いた論争最後の文章は、次のとおりのものである。このもっとも大切な、西郷本人の自筆資料が存外に軽視されて、いわゆる「征韓論」解説のみが、やたらと多い。その資料は、自筆同文のもの数通が残存しているが、日付のみは、明治六年十月十五日のものと十七日のものとがあるという。（以下は『大西郷全集』第四巻から引用。読者に判読しやすいように漢字を仮名に改めたところはあるが、原文のまま。）

朝鮮御交際の儀　御一新の涯より数度に及び使節差立てられ百方御手を盡され候えども悉く水泡と相成り候のみならず、数々無礼を働き候儀これあり、近来は人民互の商道も相塞、倭館詰居の者も甚だ困難の場合に立ち至り候ゆえ、御拠（よんどころ）なく護兵一大隊差出さるべく御評議の趣承知いたし候に付、護兵の儀は決して宜しからず、是よりして闘争に及び候ては最初の御趣意に相反し候間、此節は公然と使節差し立てらるるが相当の事に之あるべく、若し彼より交を破り戦を以て拒絶致す可き哉、其意底慥（たしか）に相顕候処迄は、尽されざるに候ては、人事に於ても残る処之有るべく、自然暴挙も計られず抔との御疑念を以て非常の備を設け差遣わされ候ては、又礼を失せられ候得ば是非交誼を厚く成され候御趣意貫徹いたし候様之あり度く、其上暴挙の時機に至り候て、初て彼の曲事分明に天下に鳴し、其罪を問ふべき訳に御座候。いまだ十分尽さざるものを以て、彼の非をのみ責め候ては、其罪を真に知る所これ無く、彼我共疑惑致し候故、討人も怒らず、討るるものも服せず候に付、是非曲直判然と相定候儀、肝要の事と見居（みすえ）建言致し候処、御採用相成り、御伺の上使節私え仰付られ候節、御内定相成り居り候次第に御座候。此段形行（なりゆき）申上候。　以上。

十月十七日　　西郷隆盛

西郷本人の文には、征韓の文字はなく、「朝鮮御交際の儀」とある。しかもその論旨は、韓国側に近来、乱暴の風があるからとて一大隊の護衛兵をつれて行くとの評議があるが、それは国際儀礼上もよろしくない。あくまでも「ぜひ交誼を厚くしたい」との趣旨をもって、平和使節として行くのでなくてはならない、と主張している。兵力の行使ということは、韓国側が交わりを拒否し、戦闘をもって臨むことが事実においてあきらかになった上でのことでなくてはならない。それまでは武力示威など決して非礼のことをしてはならない。この使節は、私（西郷）に命ぜられることに閣議で御内定になっているのだから、いままでの経緯を申し上げ、使節御任命相成りたい。

これが西郷の申し分である。（後略）

（「昭和史を読もう」葦津珍彦の主張シリーズ II『永遠の維新者』維新の理想　未完の変革―朝鮮御交際の儀　25～26ページ　発行・葦津事務所　TEL0467-22-0951）

4　遣欧使節団に対するビスマルク侯の話

「本日ノ享会（きょうかい・もてなしの会）ニ於テ、侯（ビスマルク）親（みずか）ラ其幼時ヨリノ実歴ヲ話シテ言フ、方今世界ノ各国、ミナ親睦礼儀ヲ以テ相交ルトハイヘトモ、是全く表面ノ名義ニテ、其陰私ニ於テハ、強弱相凌（しの）キ、大小相侮（あなど）ルノ情形ナリ、予ノ幼時ニ於テ、我普国（プロシア）ノ貧弱ナリシハ、諸公モ知ル所ナルヘシ、此時ニ当リ、小国ノ憤懣ヲ親（みずか）ラ閲歴シ、常ニ憤懣ヲ懐キシコトハ、今ニ耿耿（こうこう・憂える様）トシテ脳中ヲ去ラス、カノ所謂ル公法ハ、列国ノ権利ヲ保全スル典常トハイヘトモ、大国ノ利ヲ争フヤ、已ニ利アレハ、公法ヲ執ヘテ勤力サス、若シ不利ナレハ、翻スニ兵威ヲ以テス、固ヨリ常守アルナシ、小国ハ孜々トシテ辞令ト公理トヲ省顧シ、敢テ越エス、以テ自主ノ権ヲ保セント勉ムルモ、其筴弄凌侮（はろうりょうぶ・権謀術数）ノ政略ニアタレハ、殆ト自主スル能ハサルニ至ルコト、毎（つね）ニ之アリ、是ヲ以テ慷慨シ、一度ハ国力ヲ振興シ、一国対当ノ権ヲ以テ、外交ス（キ国トナラント、愛国心ヲ奮励スル、数十年ヲ積テ、遂ニ近年ニ至リ、纔（わずか）ニ其望ミヲ遂シタルモ、只各国自主ノ権ヲ全クスルノ志願ニスキサルナリ、然ルニ各国ハ、ミナ当国ノ志願ニ用ヒタル跡ヲ以テ浸（みだり）ニ憎悪シ、軍略ヲ甚ヒ、人ノ国権ヲ掠ムルモノト、非議スルト聞ク、是全ク我国ノ志ニ反セリ、我国ハ、只国権ヲ重ンスルニヨリ、各国互ニ自主シ、対当ノ交リヲナシ、相侵越セサル公正ノ域ニ住センコトヲ望ムモノナリ、従来ノ戦ヒモ皆日耳曼（ゼルマン・ゲルマン）ノ国権ノタメ、已ムヲ得サルニ用ヒタルコト、幸ニ世ノ識者ハ察スル所ナルヘシ、聞ク英仏諸国ハ、海外ニ属地ヲ貪リ、物産ヲ利シ、其威力ヲ擅（ほしいまま）ニシ、諸国ミナ其所為ヲ憂苦スト、欧州親睦ノ交ハ、未タ信ヲオク能ハサルナラン、是モ亦我国ノ志願ニスキサルナリ、然ルニ各国ハ、ミナ当国ノ志願ニ用ヒタル跡ヲ以テ浸（みだり）ニ憎悪シ、軍略ヲ甚ヒ、人ノ国権ヲ掠ムルモノト、非議スルト聞ク、是全ク我国ノ志ニ反セリ、我国ハ、只国権ヲ重ンスルニヨリ、各国互ニ自主シ、対当ノ交リヲナシ、相侵越セサル公正ノ域ニ住センコトヲ望ムモノナリ、従来ノ戦ヒモ皆日耳曼（ゼルマン・ゲルマン）ノ国権ノタメ、已ムヲ得サルニ用ヒタルコト、幸ニ世ノ識者ハ察スル所ナルヘシ、聞ク英仏諸国ハ、海外ニ属地ヲ貪リ、物産ヲ利シ、其威力ヲ擅（ほしいまま）ニシ、諸国ミナ其所為ヲ憂苦スト、欧州親睦ノ交ハ、未タ信ヲオク能ハサルナラン、是モ亦我国ノ志願ニスキサルナリ、然ルニ各国ハ、ミナ当国ノ志願ニ用ヒタル跡ヲ以テ浸（みだり）ニ憎悪シ、軍略ヲ甚ヒ、人ノ国権ヲ掠ムルモノト、非議スルト聞ク、是全ク我国ノ志ニ反セリ、我国ハ、只国権ヲ重ンスルニヨリ、各国互ニ自主シ、対当ノ交リヲナシ、相侵越セサル公正ノ域ニ住センコトヲ望ムモノナリ、従来ノ戦ヒモ皆日耳曼（ゼルマン・ゲルマン）ノ国権ノタメ、已ムヲ得サルニ用ヒタルコト、幸ニ世ノ識者ハ察スル所ナルヘシ、聞ク英仏諸国ハ、海外ニ属地ヲ貪リ、物産ヲ利シ、其威力ヲ擅（ほしいまま）ニシ、諸国ミナ其所為ヲ憂苦スト、欧州親睦ノ交ハ、未タ信ヲオク能ハサルナラン、是モ亦我国ノ志願ニスキサルナリ、然ルニ各国ハ、ミナ当国ノ志願ニ用ヒタル跡ヲ以テ浸（みだり）ニ憎悪シ、軍略ヲ甚ヒ、人ノ国権ヲ掠ムルモノト、非議スルト聞ク、是全ク我国ノ志ニ反セリ、我国ハ、只国権ヲ重ンスルニヨリ、各国互ニ自主シ、対当ノ交リヲナシ、相侵越セサル公正ノ域ニ住センコトヲ望ムモノナリ、従来ノ戦ヒモ皆日耳曼（ゼルマン・ゲルマン）ノ国権ノタメ、已ムヲ得サルニ用ヒタルコト、幸ニ世ノ識者ハ察スル所ナルヘシ、聞ク英仏諸国ハ、海外ニ属地ヲ貪リ、物産ヲ利シ、其威力ヲ擅（ほしいまま）ニシ、諸国ミナ其所為ヲ憂苦スト、欧州親睦ノ交ハ、未タ信ヲオク能ハサルナラン、是モ亦我国ノ志願ニスキサルナリ、然ルニ各国ハ、ミナ当国ノ志願ニ用ヒタル跡ヲ以テ浸（みだり）ニ憎悪シ、軍略ヲ甚ヒ、人ノ国権ヲ掠ムルモノト、非議スルト聞ク、是全ク我国ノ志ニ反セリ、我国ハ、只国権ヲ重ンスル

（）内注・村上）

《岩波文庫「米欧回覧実記」3　329・330ページ

5　荒尾精先生「対清意見」出版意図

東洋の衰運は我を駆て此義戦を起さしめ、亜細亜の頽勢は我を迎へて之が興復を図らしむ。誠に天の我国を命ずる所以のもの偶然ならざることを知らば、我国民たるものは須らく奮起して此任務を完ふする所以のものを講究せざるべからず。而して我国民が従来東方各国就中東亜の運命を将来に決すべき西隣の大陸たる清国の現勢に通ぜざるは、実に其一大欠点なりとす。然らば先づ此一大欠点を補って我国が将来如何にして清国に対すべきかを講究し、進んで亜細亜の各国を既に亡ぶるに興して欧亜の趨勢を一変するの大策を樹て、和するも亦之に依り、戦ふも亦之に依り、経綸施設総て此大策に本いて、以て之を千百年の後に成就するの鴻基を開くは、豈我帝国国民が今日に当りて已むべからざるの任務にあらずや。

（対清意見18ページ、原文カタカナ）

6　荒尾精先生「対清弁妄　序」読み下し

皇道ノ海外ニ行ワレザルヤ尚シ。所謂雄邦強国ハ営々汲々トシテ、唯権謀術数是レ闘イ、唯呑噬攘奪是レ事トス。宇内ヲ挙ゲテ弱肉強食ノ野ト為シ、民衆ヲ駆リテ狐狸豺狼ノ群ト為ス。而シテ掲々トシテ一世ヲ呼号シテ、曰ク是レ文華ノ国ナリト。甚ダシイ哉泰西人ノ妄タルヤ。

抑モ皇道ハ至誠一貫ノ道ナリ。我ガ　皇祖皇宗以テ天下ノ大本ヲ立テ、我ガ列聖天皇以テ天下ノ大経ヲ経シ、宝祚ノ隆ナル天壌無窮ト同ジクシ、皇徳ノ明カナル日月ト光ヲ争ウ。以テ　今上ノ聖世ニ及ビ、所謂六合ヲ統ベ、八荒ノ宏猷鴻謨ヲ包ミ、将ニ漸ク集大成ノ緒ニ就カントス。然レドモ独リ今ノ時事ヲ識ス者ノ四海ニ皇道ヲ恢弘シ以テ天地ノ化育ニ賛スル所以ヲ思ワザルヲ怪シム。乃チ権謀術数ヲ以テ一方ニ覇業ヲ立テント欲ス。噫、此ノ聖、豈ニ泰西ノ妄ニ惑イ、呑噬攘奪ヲ以テ文華開明ノ真壌ナリト為ス耶。

抑モ至誠一貫ノ皇道ヲ以テ弱肉強食ノ季世ニ行ウ可カラズト為ス。夫レ皇道ヲシテ行ワザル所有リ、其ノ皇道ヲ為ス所以悪クニカ在ル。至誠ヲシテ貫カザル所有リ、其ノ至誠ヲ為ス所以悪クニカ在ル。

蓋シ、至誠ハ本心ノ実徳ナリ。当ニ不昧ノ良知ヲ下スベシ。一ニシテ不弐、実ニシテ欺カズ。之ヲ以テ君国ニ対スレバ忠、之ヲ以テ父母ニ対スレバ孝、之ヲ以テ夫婦ニ対スレバ義、之ヲ以テ兄弟ニ対スレバ友、之ヲ以テ朋友ニ対スレバ信、之ヲ以テ明鏡ト為シ以テ魔窟ヲ照セバ、魑魅魍魎竄ゲ匿ルル所無シ。之ヲ以テ宝剣ト為シ以テ妖雲ヲ払エバ、則チ賊巣ヲ変ジテ安宅ト為シ、乱人ヲ化シテ順民ト為ス。之ヲ以テ経国治民ノ要道ト為セバ、則チ声名中外ニ洋溢シテ、施ハ蛮貊ニ及ベリ。

天ノ覆ウ所、地ノ載スル所、日月ノ照ス所、雨露ノ潤ス所、人力ノ通ズル所、舟車ノ至ル所、見テ敬セザル莫ク、接シテ親マザル莫ク、言テ信ゼザル莫ク、行イテ悦バザル莫シ。猶オ何ゾ弱肉強食ノ野ト狐狸豺狼ノ群トヲ患ワンヤ。

且ツ夫レ権謀術数ヲ以テ権謀術数ト闘ウ、是レ所謂梟ヲ以テ梟ニ代ウル者。此レヲ以テ宇内ノ雄邦強国ヲ六合ニ統ベ、八荒ノ宏猷鴻謨ヲ包マント欲ス。何日ニカ其ノ大成ヲ望ムベキ乎。

嗚呼、上ニ至聖ノ真皇ヲ戴キ、下ニ忠孝ノ良民ヲ擁シテ、営々汲々トシテ虎呑狼食ノ尤ニ倣ワント欲ス。識者ノ謬妄、亦タ泰西人ヨリ已甚シカラザル乎。

是ヲ対清弁妄ノ序ト為ス。

明治乙未孟春　　東方斎主人

註　宝祚―天皇の位の尊称。六合―天地と四方を合わせたもの宇宙の意。八荒―国の八方の果て。八極。
宏猷鴻謨―大きなはかりごと。天地の化育に賛する―天地自然が万物を育む恵みに賛仰し参加する事。
季世―末世。

7

7　福沢諭吉のことば

天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり。されば天より人を生ずるには、万人は万人皆同じ位にして、生まれながら貴賤上下の差別なく、万物の霊たる身と心との働きをもって天地の間にあるよろずの物を資り、もって衣食住の用を達し、自由自在、互いに人の妨げをなさずして各々安楽にこの世を渡らしめ給うの趣意なり。

（「学問のすゝめ」初編冒頭、岩波文庫11ページ）

しかのみならず貧富強弱の有様は、天然の約束に非ず、人の勉と不勉とに由って移り変わるべきものにて、今日の愚人も明日は智者となるべく、昔年の富強も今世の貧弱となるべし。古今その例少なからず。我日本国人も今より学問に志し、気力を慥にして先ず一身の独立を謀り、随って一国の富強を致すことあらば、何ぞ西洋人の力を恐るるに足らん。道理あるものはこれに交わり、道理なきものはこれを打ち払わんのみ。一身独立して一国独立するとはこの事なり。

（「学問のすゝめ」三編「国は同等なる事」前掲書28ページ）

古来世界の各国相対峙して相貪るの状は禽獣相接して相食むものに異ならず。その事実は爰に特に枚挙するに及ばず。この点より見れば我日本国も禽獣中の一国にして、時として他に食まるるか、又は自ら奮いて他を食むか、到底我れも彼れも恃む所のものは獣力あるのみ。

（「文明の利器その働を逞うして各国の交際次第に劇を加う」明治16年9月29日から『時事新報』に連載。「福沢諭吉著作集8巻」289ページ）

今朝鮮の有様を見るに、王室無法、貴族跋扈、税法さえ紊乱の極に陥りて民に私有の権なく、啻に政府の法律不完全にして無辜を殺すのみならず、貴族士族の輩が私欲私怨を以て私に人を拘留し傷け又は殺すも、人民は之を訴るに由なし。（中略）実に以て朝鮮国民として生々する甲斐もなきことなれば、露なり英なり、その来りて国土を押領するがままに任せて、露英の人民たるこそその幸福は大なるべし。他国政府に亡ぼさるるときは亡国の民にして苦だ楽まずと雖ども、前途に望みなき苦界に沈没して終身内外の恥辱中に死せんよりも、寧ろ強大文明国の保護を被り、せめて生命と私有とのみにても安全にするは不幸中の幸ならん。

（「朝鮮人民のためにその国の滅亡を賀す」明治18年8月13日時事新報に掲載。「福沢諭吉著作集8巻」267・268ページ）

8　「脱亜論」・解説・その他

左れば今日の謀を為すに、我国は隣国の開明を待て共に亜細亜を興すの猶予あるべからず。寧ろ、その伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、その支那、朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の解釈に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に従て処分すべきのみ。悪友を親しむ者は共に悪名を免かるべからず。我れは心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり。

（「脱亜論」明治18年3月16日時事新報掲載。福沢諭吉著作集8巻264ページ）

第一に、日本が他に先駆けて朝鮮を独立国として認め、開国に導いたのは日本外交の『栄誉』であり、したがってまた、その後の開化、文明化を援助することは日本の責任であると福沢は言う。日朝修好条規はいわゆる砲艦外交による片務的不平等条約であったが、しかし、それは文明開化への扉を開いたことになるのだから、非難するに及ばない、むしろ歓迎すべきことだという見方は福沢の持論で、ペリー艦隊の来航・安政条約が日本の文明開化を促進したという評価を彼は終生変えることがなかった。朝鮮の場合にも、立場は逆になるが、この考え方によっているのである。

（西川俊作慶応大学名誉教授による「解説」。福沢諭吉著作集8巻『福沢諭吉にとっての朝鮮問題』404ページ）

もし強いて著作者を分類して、言い足らぬ人と言い過ぎる人と、ただ二つにするとすれば、福沢は明らかに後者に属する。ことに『学問のすゝめ』には、当初から矯激の文字が多く、今日の目をもって見て必要以上に嘲罵の言を弄して人心を激した嫌いがあるが、しかしここに福沢の面目があるのであろう。当たり触りのない事を言わなかった。当たり触りのない事は、彼をもって見れば言う必要のない事であろう。（岩波文庫「学問のすゝめ　解題　小泉信三」196ページ）

「けだし本大臣は、思えらく、これに処するの道、ただ我が帝国及び人民を化して、あたかも欧州邦国の如く、欧州人民の如くならしむるあるのみ。即ちこれを切言すれば、欧州的一新帝国を東洋の表に造出するにあるのみ。

本大臣の所見を以てすれば、我が人民をして欧州人民と蝕撃し、各自に不便を感じ不利をさとりて、泰西活発の知識を吸取せしむるにあるのみ。即ち我が国人が、文明開化に要する活発の知識、敢為の気象をそなふるに至て、我が帝国は、始めて真に文明の域にゐることを得べきなり。」

（井上馨外相の閣議に於ける発言。『世外井上公伝』第三巻、原文はカタ仮名を用う。葦津珍彦著「大亜細亜主義と頭山満」。葦津珍彦の主張シリーズV 36ページより孫引き）

9　結語

1. 日本は西南戦争以降（遣欧使節たちによって、藩閥勢力争いによって）、当初の維新の精神を失った。
2. 福沢諭吉の云いたい所は「学問のすゝめ」の冒頭部分ではない。福沢の矯激なことばが、当時から今日に至るまでの日本人の心を、節度の無い欧米化に向かわせた。
3. 東方斎荒尾精先生は西郷隆盛と心を同じくし（道義外交、礼譲外交）、本然の日本人、本然の維新の精神を貫こうとしていた。
4. 私たち日本人は、孫文が神戸での講演（大アジア主義）の中で問いかけた「日本は世界文化に対しての西方覇道の番犬となるか、東方王道の干城となるを欲するか？」と云うことばに答えなければならない。勿論、王道を歩むべきであり、荒尾精神を汲む愛知大学は、その魁となって活躍される事を希求する。